

# ジョージ・オーウェルの劇評（1940-1941） 試訳と注解

Drama Reviews of George Orwell (1940-41): Japanese Translation and Notes

川端康雄・熊谷由里子

KAWABATA Yasuo and KUMAGAI Yuriko

## はじめに

ジョージ・オーウェル（George Orwell, 1903-50）が一時期映画評論と演劇評論を手掛けていたことはあまり知られていない。それは第二次世界大戦の初期、1940年から41年にかけてのことである。媒体は週刊誌『タイム・アンド・タイド』（*Time and Tide*）だった。劇評は同誌の1940年5月18日号から開始し、同年9月7日号まで14回掲載したあと中断し、1941年1月4日号から再開、41年8月9日号までさらに11回掲載、併せて25回分の劇評を寄せている。映画評のほうは1940年10月5日号から開始し、1941年8月23日号まで27回連載した。

その頃、イギリスの状況はどうであったか。大戦勃発直前までチェンバレン内閣は対独融和政策を採っていたが、1939年9月1日のドイツ軍のポーランド侵攻を受けて、9月3日にドイツに宣戦布告、開戦後半年ほどは西部戦線は「まやかしの戦争」と称される膠着状態が続く。それが1940年5月に至って一気に動き出す。チャーチルを首班とする挙国一致内閣が成立した5月10日、ドイツ軍がベルギーとフランスに進攻、この電撃作戦の成功によって英仏軍は敗走し、英軍はダンケルクからの撤退を余儀なくされる。6月末にはフランスが降伏。米国は未だ中立を保ち、英国は孤立状態に置かれる。そして1940年7月にはドイツ空軍が英国本土に攻撃を仕掛け、それを英空軍が迎え撃つ。4か月近くにおよぶ航空戦「バトル・オブ・ブリテン」（Battle of Britain）の開始である。ドイツ軍の英国本土上陸を阻止したものの、ロンドンをはじめとする英国の諸都市への空襲が激しさを増す。

オーウェルが劇評と映画評を手掛けていたのは、まさにそのような危機の時代であった。そうしたなかで書かれたそれらのレビュー、とりわけ劇評は、オーウェルの文学観・演劇観を確認するテキストというだけにとどまらず、戦時下のロンドン（とりわけウェストエンド）の劇場の様子を窺い知ることができ、社会史的な資料としても有用であるといえるだろう。

発表媒体の『タイム・アンド・タイド』は1920年にロンダ子爵夫人マーガレット・ヘイグ・トマス（Viscountess Rhondda, Margaret Haig Thomas, 1883-1958）が創刊。1970年まで週刊。その後月刊になったり隔週刊になったりし、1979年に廃刊。知的で革新的な無党派の雑誌で、時事問題、詩、短編小説、文芸評論、各種芸術評論などを掲載した。主な寄稿者にレベッカ・ウェスト、D.H. ロレンス、ヴァージニア・ウルフ、バーナード・ショーらがいる。同誌にオーウェルは劇評と映画評以外にも書評やエッセイも多く書いており、併せると寄稿した原稿は90点近くに

のほる<sup>(1)</sup>。

以下、同誌に寄せたオーウェルの劇評の全文の訳文を訳出し、評されている作品、作者、劇場の情報などについて適宜訳注を附す。なお、亀甲括弧〔 〕は訳者による補注である。(川端記)

## 試訳と注解

### ①『タイム・アンド・タイド』1940年5月18日号<sup>(2)</sup>

#### 『良きチャールズ王の黄金時代に』バーナード・ショー作 ニュー・シアター<sup>(3)</sup>

何の筋の運びもない3幕構成の劇を上演するには、バーナード・ショー、あるいはショーのような作者でなければいけないが、この再演でそれが本当だと確認できる。この劇は魅力的で機知に富んだ<sup>アクション</sup>会話<sup>カンヴァセーション・ピース</sup>劇である。

時代は1680年。〔イングランド国教会聖職者の〕タイタス・オーツが名声の極みにあり、バッキンガムとシャフツベリーがこの国の真の支配者になっている。王〔チャールズ二世〕は、本人の言では、王冠を頭上に、首を両肩の上に保つので精一杯で、その合間に科学研究、馬、犬、それに女性をも楽しんでいる。最初の2幕は、サー・アイザック・ニュートンの家で進む。ニュートンは、彼のパトロンである王を追って動きまわる騒々しいハーレムに大いに苦しんでいる。王、クエーカー教徒のジョージ・フォックス、ニュートン（漫画雑誌に出てくる心ここにあらずの教授に酷似している）、ヨーク公（未来の破滅の運命が全身に書かれている尊大な愚か者）、それに画家のゴドフリー・ネラー（アインシュタインを少々先取りするところがあり、それでニュートンをうろたえさせる）——こういった面々が活発で騒々しい会話を繰り広げる。〔王の愛妾の〕ネル・グウィンとバーバラ・ヴィリエ（盛りを20年過ぎていたが、プロとして未だに美しさを保っている）が舞台中を所狭しと喧嘩し、ポーツマス公爵夫人は王に愛の媚薬をしきりに勧め、ニュートンにむ

(1) 『タイム・アンド・タイド』の歴史についてはSullivan, pp. 441-53を参照。同誌へのオーウェルの寄稿についてはFenwickを参照。

(2) *Time and Tide* Vol. 21, No. 20 (18 May 1940), p. 534. *CW*, vol. 12, no. 624, pp. 162-63. 以下、劇評の連載を通し番号で示す。

(3) 『良きチャールズ王の黄金時代』(*In Good Charles' Golden Days*) は、1892年に『やもめの家』(*Widowers' Houses*) でデビューして以来、生涯に50編を超える戯曲を執筆したジョージ・バーナード・ショー (George Bernard Shaw, 1856-1950) による晩年の戯曲。「決して起こらなかった本当の歴史 (A True History that Never Happened)」という副題を附す。メインタイトルは18世紀の風刺唄「ブレイの牧師 (The Vicar of Bray)」の冒頭のフレーズにちなむ。執筆は1939-40年。当初は映画監督ゲイブリエル・パスカル (Gabriel Pascal, 1894-1954) の依頼で映画版ヒット作『ピグマリオン』(*Pygmalion*, 1938) に続く映画用の脚本として着手されたが、結局映画化はなされず戯曲として発表された。モルヴァーン・フェスティバル・シアター (Malvern Festival Theatre ウスター州モルヴァーン) にて1939年8月初演。ロンドンのニュー・シアターの公演は1940年5月9日開幕。6月9日まで併せて29回上演された。上演データについては主にWearingを参照した (以下同様)。

ニュー・シアター (New Theatre) はロンドン、ウェストミンスター区セント・マーティンズ・レインにある劇場。劇場建築を専門とするスプリグ (W. G. R. Sprague, 1863-1933) の設計により1903年建造。外装は古典主義様式で内装はロココ様式。客席は4層960席。1973年にオールベリー劇場 (Albery Theatre) に改称、さらに2005年に改修のうえノエル・カワード劇場 (Noël Coward Theatre) と改称されいまに至る。

かって、太陽と地球の距離は20マイル、25マイルかもしれませんね、などと言う。最終幕では、チャールズとブラガンザのキャサリンだけが舞台にいる。王妃が王の母親役の優しい中年の女性として現れる。愛人がほかの全員を集めたよりも大事だと王が言うので、王妃は愛人にすっかり王を委ねている。チャールズと王妃の関係は本当にこのようなものだったのだろうか。これは信じがたい。それ以外の点ではこの劇は史実に忠実で、チャールズが王位を維持した手練手管を、縮約したかたちで非常によく描き出しているといえる。

王役のアーネスト・セシジャーの演技は秀逸で絶妙である。他の役者については、キャサリン役のアイリーン・ヴァンプラ、ネル・グウィン役のアイリーン・ベルドン、そしてサー・アイザック・ニュートン役のセシル・トラウンサーが当夜名演技を披露した。ダフニ・ハード（バーバラ・ヴィリエ）とウィリアム・ハッチンソン（ヨーク公）は、難しい役柄だが演技過剰の気味があった。ハーバート・ローマズは、天才と狂人紙一重のジョージ・フォックスというおそらく再現が不可能な役どころで最善を尽くした。この戯曲の今回の上演にはひとつ重大な欠点がある。衣装がひどいのだ。17世紀の劇では、これはまったく言い訳が立たない。女性の衣装はなんとか我慢できるものだったが、男性の衣装は色覚異常の人がデザインしたように見える。ロングランになるようなら、確かにこの点は是正されるべきであろう。

②『タイム・アンド・ Tide』1940年5月25日号<sup>(4)</sup>

『怖るべき親たち』ジャン・コクトー作、<sup>フランス</sup>キャロライン・フランキー翻案 ゲイト劇場<sup>(5)</sup>

コクトー氏の戯曲は、イプセンが寝室の笑劇に手を染めたとしたら生み出したかもしれないたぐいのものだが、ただのおふざけものではない。あからさまに近親相姦の主題を中心に展開する。ウェストエンド〔の大劇場〕向きの作品なのにそこで上演されないのはそのせいなのかもしれない。

劇の始まりは落ちぶれた中流家族を示す。中心人物であるイヴォンヌは役立たずのだらしのいい女で、糖尿病に苦しんでおり、成人した息子のミシェルをヒステリックなまでに溺愛している。夫のジョルジュはうだつの上がらない発明家である。遠景にはイヴォンヌの妹のレオニーがいる。レオニーは家族のなかでだれよりも知性があるのだが、ジョルジュに恋していることが隠しようもない。ミシェルがマドレーヌという若い女性と同棲していて、しかもその女性がだれか見知ら

(4) *Time and Tide* Vol. 21, No. 21 (25 May 1940), p. 558. CW, vol. 12, no. 626, pp. 165-67.

(5) フランスの劇作家、芸術家のジャン・コクトー (Jean Cocteau, 1889-1963) の戯曲『怖るべき親たち』(*Les Parents Terribles*, 1938) は1938年11月にパリのアンパサドゥール劇場で初演。興行は成功したもの、同年12月にパリ市会はこの劇に近親相姦の気味があるとして上演禁止の処分を下した。キャロライン・フランキー (Caroline Francke, 1899-60) の英訳による本上演がイギリスでの初演だった。戯曲の邦訳は以下に収録。「怖るべき親たち」鈴木力衛・大久保輝臣訳、『ジャン・コクトー全集 7』堀口大学監修、創元社、1983年、209-98頁。ゲイト劇場 (Gate Theatre) は1925年に英国の俳優、映画監督のピーター・ゴドフリー (Peter Godfrey, 1899-1970) が革新的・実験的な戯曲を上演するためにゲイト劇場サロン (Gate Theatre Salon) としてロンドン、コヴェント・ガーデンに設立。1927年にチャリング・クロス駅近くのヴィラーズ街に移転。1934年から40年まで劇作家、演劇プロデューサーのノーマン・マーシャル (Norman Marshall, 1901-80) が経営し、『ヴィクトリア女王』(*Victoria Regina*, 1935)、『オスカー・ワイルド』(*Oscar Wilde*, 1936) などを上演した。1941年にドイツ軍のロンドン爆撃によって劇場は破壊され、閉館を余儀なくされた。

ぬ年配の男の愛人であることを知って、イヴォンヌは常になく激しいヒステリーの発作に襲われる。それから事態はさらに錯綜してゆく。ジョルジュは、ほんの東の間レオニーと二人きりになったときに、マドレーヌについて恐ろしいことに気づいたと告げる。ここでイプセンの幽霊<sup>(6)</sup>が客席のあいだをさらさらと音をたてながら通りすぎるのをはっきり感じることができる——「彼はマドレーヌが自分の不義の娘だと言うつもりだ！」——ところがそうではなく、もっとひどいことで、彼女を愛人にしている見知らぬ男というのが、ジョルジュ自身だったのだ！ジョルジュは男やもめだと偽って、マドレーヌと偽名で暮らしていた。ついでながら、ジョルジュはマドレーヌのアパートの家賃をレオニーからの借金で支払っていた。

翌日、家族全員がマドレーヌのアパートマンに押しかける。当然ながら、年長の三人は惨めな娘をミシェルの人生から追い出すことに決め、さらに別の愛人をでっち上げることで彼女の評判を失墜させることをたくらむ。だがここでこの劇の意外なポイントが示される。マドレーヌは彼らが思っていたような人物ではまったくない。たとえ厳密には「良い」とは言えないのであっても、まっとうで、正直、勤勉で忠実な、あらゆる点で立派な娘なのだ。ミス・ヴィヴィアン・ベネットの演技を見て、その台詞を聞くと、マドレーヌがミシェルに恋をし、同時に、本人が言うように、ジョルジュに対する「とても優しい気持ち」を保持しようというのも、嘘ではないと感じられる。

当座はマドレーヌは脅されてミシェルのことをあきらめさせられるが、後になってレオニーが娘の側に立ち、事態の収拾を約束する。その約束を彼女は劇の終わり近くになってようやく果たすことになる。イヴォンヌはインスリンが切れてしまったために倒れる。彼女は死に際の苦しみのなかで、最後にすべてを台無しにしようと考え、ミシェルにマドレーヌの元恋人の名前を明かそうとするが、ミシェルが部屋から閉め出されているので、それは果たされない。イヴォンヌが息を引き取ると、みな多少なりとも安堵の思いを隠せない。これでミシェルはマドレーヌと結婚し、レオニーはどうやらジョルジュと結婚することになるようだ。レオニーには、医者をすぐに呼ばなかったことで姉の死を確実にしたのではないかという疑惑が濃厚にある。まったく不道德な結末だが、純然たるハッピー・エンディングでもあり、これは疑いなくコクトー氏の思惑どおりなのだろう。<sup>デューブル・オヴ・アフィニティ</sup>姻戚禁止近親表を含めて、「ブルジョワの道德」を打倒しないかぎり本当の生活を始めることはできない、というわけである。

演技は見事。5人のなかでいちばん生彩を欠いていたのはミシェル役のシリル・キューザックかもしれないが、明らかにこれはいちばん難しい役どころである。ヴィヴィアン・ベネットとマーティータ・ハント（レオニー役）が素晴らしい。観客と舞台が近接しているこの手の小劇場では、力みすぎない自然な演技が好ましい。そうした演技法は他の劇場の場合は加減が必要かもしれないが、この種の劇にはよく合う。舞台装置については、とりわけ第1幕と第3幕など絶妙であった。

(6) イプセンの戯曲『幽霊』(Gengangere, 1881)で登場人物のオズヴァルとレギーネは異母兄妹であることを知らずに愛し合う。

『ギャリソン劇場』 パレイディウム劇場<sup>(7)</sup>

ラジオ番組から舞台に移されたこのヴァラエティ・ショーはとても乗りがよく、ほとんど飽きさせない。軽業師が宙に舞い上がり、美女たちの一群が軍隊式の正確さで帽子を蹴り、スヌーカーの世界チャンピオンのジョー＝デイヴィスが、この目で見てゐるのに信じられないようなキュー捌きをする。ムーア・マリOTT、グレイアム・モファット、ハリー・テイト（ジュニア）は、自動車を起動させようとしてできない笑劇を演じる。舞台変換の合間に、ジャック・ウォーナーは彼の「娘<sup>リトル・ゲル</sup>子」であるジョン・ウィンターズを相手にすばらしく下品な悪ふざけを繰り広げる。なかでも最高の出し物は、〈アバディーンの三人組〉かもしれない。彼らは見事な曲芸を穏やかな卑猥さで活気づかせる。明らかに愛国的な演目が2つあるアイテムがあった。その2つ目は掃海艇のシーンで、〈50人の歌う海兵隊〉が登場し、絵になる背景をうまく使った巧みな演出になっている。唯一の難点は、舞台の最後に流れる二国の国歌である。言わせてもらうなら、フランス国歌「ラ・マルセイエーズ」の最初の4小節をイギリス国歌「ゴッド・セイヴ・ザ・キング」の最後の4小節に重ねてしまうのは、良い音楽を奏でるのには向かないのではあるまいか。イギリスとフランスは両者の経済資源を出し合ってきたのだから、もうそれだけで十分なはずである。

③『タイム・アンド・タイト』1940年6月1日号<sup>(8)</sup>

『スウィングング・ザ・ゲイト』アンバサダーズ劇場<sup>(9)</sup>

たいていのレビュー同様、観客が何を理解し何を理解しないか予測がつかないため、この劇は、騒々しさと洗練のあいだを揺れ動いた。この点は、女優のハーマイオニ・ギンゴールドが、ラ・ジョコンダ〔モナリザ〕の物真似をしたときと、失望したバッカスの巫女の物真似をしたとき、また第一幕の終わりでスパイ学校でのバーレスクがあったが、こういった場面で特に顕著だった。これらの場面はあとほんの少し「ハイブラウ向き」に演じられていたなら、非常に面白くなっていただかもしれない。いちばん上出来の出し物は、ピーター・ユスティノフによる教会の聖歌のバーレスクと、哀愁に満ちたスケッチ「征服する英雄」だった。「征服する英雄」はガイ・ヴァーニーが休暇中の伍長役で、前線で起こっていることに家族が関心を持つように努めるものの無駄に終わるという話である。この長いプログラムをとおして気づかされる特徴のひとつは、戦争への言及がほとんどないという点である。全体として、あまりぱっとしない上演だったが、観客が面白がって拍手喝采したところを見ると、確実にロングランが見込まれそうである——ヒトラーが許

(7) パレイディウム劇場 (London Palladium) はロンドン、ウェストミンスター区のアーガイル街にある劇場。興行主のウォルター・ギボンズ (Walter Gibbons, 1871-1933) によって1910年に開館。収容定員は2286人。

『ギャリソン劇場』 (Garrison Theatre) は最初1939年11月に英国BBC放送のラジオ番組でヴァラエティ・ショーとして放送され、それが評判になったことで舞台化された。

(8) *Time and Tide* Vol. 21, No. 22 (1 June 1940), pp. 585-86. CW, vol. 12, no. 631, p. 174.

(9) アンバサダーズ劇場 (Ambassadors) は W. G. R. スプレイグの設計によって1913年に建てられたウェストエンドの劇場。コヴェント・ガーデン近くのウェスト街にある。収容定員は444人。同劇場でのレビュー『スウィングング・ザ・ゲイト』 (Swinging the Gate) の公演は1940年5月22日から9月10日まで、併せて128回上演された。



せばということだが。

④『タイム・アンド・ Tide』1940年6月8日号<sup>(10)</sup>

『テンペスト』ウィリアム・シェイクスピア作 オールド・ヴィック劇場<sup>(11)</sup>

「墓のなかで寝返りを打つ」〔死者が嘆いて安らかに寝てられない〕というようなことが本当にあるとしたら、シェイクスピアはたっぷりと体を動かさなければならないだろう。オールド・ヴィック劇場での『テンペスト』の上演によって、シェイクスピアはいまひとつたび体をいやな具合にびくりとさせられたに違いない——このような時局でこの上演を企画した興行主たちを称えなければならないのではあるが。

シェイクスピア劇は、ほとんどいつも、彼を大事に思う人びとを身もだえさせるように上演されるのだが、それはどうしてなのだろう。じつは落ち度があるのは役者でなく観客なのだ。シェイクスピア劇を上演して見てもらわねばならない観客は、大方がエリザベス朝の英語にまったく馴染んでおらず、そのためもっとも単純なくだり以外はついていくことができない。悲劇は、他のジャンルの劇よりよく知られているし、とにかくどの劇も殺人がてんこ盛りなのでかなりうまくいく場合が多いが、喜劇と、歴史劇のなかの最高作（『ヘンリー四世』と『ヘンリー五世』）となると——とりわけ散文のインターラード〔幕間の喜劇〕は——絶望的だ。というのも、観客は十中八九その戯曲を知らず、尻に一蹴り入れる演技があとに続くのでなければ、どんなジョークも聞き逃すことが見込まれからだ。役者ができることはせいぜい猛スピードで台詞をまくしたて、できるだけ多くの馬鹿騒ぎを起こすことだけだ。観客が笑うとしても、それはギャグに対してであって、シェイクスピアが書いたものに対してではないということがよくわかっているからである。オールド・ヴィックで上演された『テンペスト』も例外ではなかった。ステファノーとトリンキュローのすべてのシーンはいつものおふざけと大騒ぎによって台無しにされた。オールド・ヴィックで観客のあいだで慈しまれる伝統となっている物音や足を小刻みに動かすことは言うまでもなく。エアリアルとキャリバンなどはサーカスから逃げ出したものに見えた。確かにキャスティングが難しい役だが、今回のようにかくもグロテスクにする必要はなかった。キャリバンは間違いなく猿として造形されていて、尻尾があれば完全に猿だったし、明らかに顔に何らかの嫌な病気の跡があった。たとえキャリバンがもっと音楽的に話したとしても、これは台詞の効果を台無しにしていただろう。エアリアルは、何らかの理由で明るい青に塗られていたが、ひどく風変わりな、誇張された同性愛者をことさらに強調するようなお決まりの演技にふけていた。ピーターパンならぬピーター・パンジーといったところだ。

(10) *Time and Tide* Vol. 21, No. 23 (8 June 1940), pp. 610-11. CW, vol. 12, no. 636, pp. 179-81.

(11) オールド・ヴィック劇場 (The Old Vic) はロンドンのサウス・バンクのランベス区にある。1818年にロイヤル・コーバーク劇場 (Royal Coburg Theatre) として現在のウォータールー駅から遠くない場所に建てられ、テムズ川の北から観客を動員できると期待された。当時は上流階級の集う場所には程遠く、主にメロドラマが上演されていた。1833年に改装がおこなわれた際にヴィクトリア王女 (当時) の訪問を記念してロイヤル・ヴィクトリア劇場 (Royal Victoria Theatre) と改名され、今日に至るまで「ヴィック」と呼ばれている。収容定員は1067人。シェイクスピアのロマンス劇『テンペスト』 (*Tempest*, 1611) の同劇場での公演は1940年5月29日から7月6日まで、併せて35回上演された。

ジョン・ギールグッドは、魔除けの呪文を最小限に抑えた、高齢者ではなく中年のプロスペローとして、その他のキャストよりもはるかに優れた演技をおこなった。ミランダ役のミス・ジェシカ・タンディは、台詞回しは上手かったがミスキャストだった。コーデリアが黒髪であるべきだということと同様に、ミランダは青い目と金髪であってはいけない。当夜の上演でいちばん良かったのは付随音楽だった。劇のロマンティックな設定に、背景よりもはるかによく合っていた。概して、よかれと思ってなされた上演だったが、シェイクスピアは、5、6篇の有名な戯曲を除いて、一般の人びとが読むまで上演は無理であろうということを示した結果となった。

『静かな宿』 デニス・オグデン作 ヨーク公劇場<sup>(12)</sup>

『異国への旅立ち』に何がしかの影響を受けていると思しき不気味な劇<sup>(13)</sup>。6人の旅行者が、実のところは存在などしていない、ある田舎の宿に偶然足止めされていると気づいたら、ちょうど1年前にその場所で起こった殺人事件が目の前で再現されてしまう。その結果として、6人がその宿にたどり着く理由となったさまざまな個人的な問題が解決されていく。登場人物の台詞には説得力があり、怪しい雰囲気もうまく演出されていたが、劇の弱点は、6人の主要人物の問題が、真剣に受け止めるには難しいたぐいのものだった、ということにある。牧師は兄弟を肺炎で亡くしたために信仰を失い、社交界で名花と称えられている若い令嬢は人生が虚しいと思っている、といった悩みのだ。1940年の上演であるのに、この劇は戦争について直接的にも間接的にも言及していない。経済的な成功、自動車、離婚等といったことだけが中心的な関心事となっている平時のブルジョアの生活が、明らかに、永久不変のものとみなされている。ミス・ルイズ・ハンプトンは、ジャーナリストでかつ『女性のページ』の編集長として成功を収めたジョアンナ・スプリング（「マッジおばさんに書いてください」の担当者）役をとてもうまく演じていた。演技全般はもっとよい戯曲にふさわしいものだった。

『ヘレンの肖像』 オードリー・ルーカス作 トーチ劇場<sup>(14)</sup>

表面上はハイブラウ向けの劇だが、新たな筋などもう作りえないという主張を裏付けてしまっている。この劇は、洗練された趣味という薄いベニヤ板の下に、4ペンス小説の心理的雰囲気

(12) ヨーク公劇場 (Duke of York's Theatre) はロンドン、ウェストミンスター区セント・マーティンズ・レインにある1892年に開業した劇場。収容定員は開業時は900人で現在は640人。同劇場でのデニス・オグデン (Denis Ogden) の『静かな宿』 (*The Peaceful Inn*) の公演は1940年5月28日から6月22日まで、併せて30回上演された。オーウェルは1940年5月31日付の日記に次のように書いている。「昨夜、デニス・オグデンの劇『静かな宿』を観に行った。なんとも恐るべき陳腐な劇だ。興味深いのは、この劇の時代は1940年なのに、直接的にも間接的にも戦争に言及している箇所がないことだ」(『オーウェル日記』298頁)。

(13) 『異国への旅立ち』 (*Outward Bound*, 1923) は英国の劇作家サットン・ヴェイン (Sutton Vane, 1888-1963) 作。注52を参照。

(14) トーチ劇場 (Torch) はトーチ・シアター・クラブ (Torch Theatre Club) のことであり、ロンドンのナイツブリッジに1938年にオープンした劇場。同劇場でのオードリー・ルーカス (Audrey Lucas, 1898-1975) の『ヘレンの肖像』 (*The Portrait of Helen*) の初演は1940年5月28日。オーウェルの日記によれば、彼はこの「ハイブラウ向け」の劇を2日目の5月29日に見た。その幕間の時間にイギリス軍のダンケルク撤退の最初のニュースを聞いたと記している (『ジョージ・オーウェル日記』297頁)。

漂わせている。成功したせいで荒んでしまった小説家、ピーター・ウェルズの別れた妻（元々純真な人柄だった）のリディア・ウェルズは、20年後、元夫の家の家政婦の職を得、リディアが母親だと知らずに大きくなった子供たちを見守るために家に戻ってくる。（あの話だとピンと来たでしょうか？ そのとおり、『イースト・リン邸』だ！<sup>(15)</sup>）夫の2番目の妻は、亡くなったばかりだったが、いまでも家族全員から聖人と見なされている。しかし実際には嫉妬にかられ、夫の連れ子の人生を台無しにしようと懸命に努める冷血な策士だった。その妻は、本当に、おとぎ話に出てくる邪悪な継母だった。主に成し遂げたことはと言えば、娘のロバータを、1920代風の典型的なモダンガールの見本に仕立て上げたことだ。この娘はカクテルを飲みまわったり、あまり好ましくない若い男性とデートをしたり、中年の誘惑者と危険なほど深い関係になったりする。一方、息子のジョンは、真面目な青年で、通常では真価のあると評せるような性格のパーラーメイドと密かに婚約している。ここで、プロットは、パッと『イースト・リン邸』から『一介の女工』<sup>(16)</sup>に変わる。言うまでもなく、いつも賢明なリディアはすべてを正し、夫の懷に戻ることで終わる。しかし、家庭のさまざまな状況を何も省かないようにするために、もう一人ラルフ・ドリュエリーという名の旧友を登場させている。20年間リディアを崇拝している忠実な犬のような恋人（『サッカーの』『虚栄の市』のドビンのような人物）で、自分より好ましい男に喜んで彼女を譲ってしまうのである。

判で押したような決まりきった設定のなかに、少しは良い台詞があった。しかし舞台運営はきわめてひどいものだった。登場人物が意味なく舞台にいることが多く、劇全体に強く影響しているはずの死んだ妻ヘレンの肖像画は、観客の半分しか見ることができない位置に置かれていた。演技に関しては、リディア役のミス・ドロシー・グリーンが、本質的に思いやりのない役柄を巧みに表現し、ピーター・ウェルズ役のエドモンド・ウィラー氏と、教養ある中年の誘惑者を演じたナイジェル・クラーク氏も称賛に値する。

##### ⑤『タイム・アンド・タイド』1940年6月15日号<sup>(17)</sup>

##### 『君に遺そう』ノエル・カワード作 スレショールド劇場クラブ<sup>(18)</sup>

バリー・ペインの小説がエドワード時代に属しているように、カワードの喜劇は間違いなく

(15) 『イースト・リン邸』（*East Lynne*）は英国の作家エレン・ウッド（Ellen Wood, 1814-87）が1861年に発表したセンセーショナルな小説。

(16) 『一介の女工』（*Only a Millgirl*）はおそらく1980年ごろに出版されたエリック・ロス（Eric Ross）著の小説『一介の女工——あるいはあるマンチェスターの男の復讐』（*Only a Mill Girl: Or, a Manchester Man's Revenge*）、あるいはその映画化作品（1919年）に言及している。

(17) *Time and Tide* Vol. 21, No. 24 (15 June 1940), p. 642. *CW*, vol. 12, no. 638, pp. 184-86.

(18) 劇作家ノエル・カワード（Noël Coward, 1899-1973）の『君に遺そう』（*I'll Leave It to You*, 1919）はカワードの初期作品。3幕の軽喜劇で、1920年に初演。スレショールド劇場クラブ（Threshold Theatre Club）は英国の俳優エルウィン・ブルック＝ジョーンズ（Elwyn Brook-Jones, 1911-62）とジーン・アースキン（Jean Erskine, 1916-2011?）によって1940年4月12日にロンドン、ノッティンガム・ヒルのチェプストウ・ヴィラズにオープン。1943年にはゲイトウェイ劇場クラブ（Gateway Theatre Club）と改称、すぐ北にあるウェストボーン・グローブに移転した。



1920年代に属している<sup>(19)</sup>。しかし作家がかくも軽妙なタッチで書いていたら、劇が多少「古くさい」としても何か問題になるだろうか？『君に遺そう』は、早口の会話と、端的にいったりえない設定で2時間の娯楽を提供し、何の思考も引き起こさないということは請け合える。それがすべて狙いどおりであることは疑いない。

教養ある裕福な家の話から劇は始まる。その子どもたちは「解放」されていて、常に年長者に無礼な態度を取る。子どもは5人いて、みな多かれ少なかれ、流行しているような仕方で「知的」であり、いずれも生計のためになど働かないと固く決心している。最近父親が亡くなったばかりで、死後の手続きの一切を済ませてみたところ、遺族には「1ペニーもない」ことを知り愕然とする。実際には年に1,500ポンド程度しかないというのだ。折しも、20年会っていなかった金持ちの叔父がアメリカからやって来る。すでに叔父が到着前に、子どもたちも母親も、残りの人生をその叔父に依存して生きると決めていた。しかし、叔父は、彼らに仕事をしなければならぬだろうと穏やかに言う。叔父は、睡眠病〔熱帯アフリカの伝染病〕に罹っていて、余命がちょうど3年だと言う。そして、子どもたちの向上を見守り、彼らのなかで2、3年のあいだに叔父の目から見て「改善〔成功〕」した者に彼の莫大な財産を全額遺すつもりだと言う。そして儉約や勤勉、自立等に関して優れた助言を与えて叔父は立ち去る。

場面は1年半後に移り、5人の子供たち全員が称賛に値するかたちで、また——年齢を考えると——ほとんど信じられないような仕方ですべて「改善」する。長女は映画に出演しスターになりかけている。次女は小説で見事な成功を収めた。長男は自動車業界で良い仕事についており、下の弟は流行歌を書き大いに稼いでいる。まだ学校に通っている末娘でさえ、改心し、数々の賞をもらいだした。さまざまな会話が交わされるうちに、叔父が世を去る前に、子どもたちのそれぞれを個別に呼び、「実は君を相続人に選んだのだ」とささやいていたことが明らかになる。もちろんこれは非常に刺激的な効果があった。しかし、叔父が再び登場し劇に最大の驚きが訪れる。種明かしをしても劇を台無しにすることはないだろうと思う。はなから観客にはわかりきっているからだ——もっとも、劇中の子どもたちには明らかでないというのも確かなのはあるが。叔父は睡眠病に罹ってなどおらず、南アメリカ近くにいたこともなく、時折競馬で当てる以外金を持っていなかったのだった。子どもたちはありもしない餌に釣られてがんばったというわけだ。しかし、最後の瞬間に、さらにもうひとつ驚く展開がある。これもかなり簡単に予測できるようなものだ。

このようなナンセンスな劇が魅力的になりうるとは信じがたいかもしれないが、実際魅力的なのだ。会話が軽妙で、時には、真の滑稽さの域にまで達しているからである。策士である未亡人が南米の所有物について叔父に問いただすシーン（「ところでデヴィスさん、所有されているのはどんな鉱山ですか？」——「ああ、それは混合鉱山です。金、銀、銅、真鍮——すべてほんの少しずつですが」）は、『チャーリーの叔母』<sup>(20)</sup>で見られたような面白さであったが、それな

(19) バリー・ペイン（Barry Pain, 1864-1928）は1891年から1927年までのあいだに50冊以上を出版した作家。

(20) 『チャーリーの叔母』（*Charley's Aunt*）は英国の劇作家ブランドン・トマス（Brandon Thomas, 1856-1914）作の3幕の笑劇。1892年に初演。

りにいい線をいっていた。叔父役エリック・フォートの演技は絶妙である。叔父役以外では、いちばんの好演はミス・リタ・ダグマーであろうか。末娘を演じていたが、大人では演ずるのが難しいはずであったのに見事に演じ切っていた。才能あふれる演技と知的な観客を占める地位にいるこの劇場が、近い将来、よりシリアスな演目を上演予定だというのは朗報である。

スレショールド劇場クラブは、戦時の世界であっても舞台を存続させようと実際的な努力をしている。その特別なアイデアというのは、従軍している、あるいは従軍のために訓練している俳優に実演し名前を一般に公開する機会を与える、というものである。前回の戦争〔第一次世界大戦〕で国のために命を危険にさらした俳優たちが、数年後に戻って来たら、みなに忘れられていたことに気づいたということがあった。俳優たちはこういったことを繰り返さないと決意していた。この劇場には1940年用の多種多様なプログラムがある。『十人十色』〔ベン・ジョンソン作〕、『グラン・ギニョール』〔パリの大衆芝居〕、〔クリストファ・〕マローウの『エドワード二世』、そして、それぞれに登場する主演「スター」によって選ばれる一連のウェストエンドの劇がある。クラブ会員の多くが俳優であり、ミス・ジュリア・ニールソン・テリー、ビリー・マイエル氏、ジョン・ペンローズ氏らが、その他のメンバーとともに『君に遺そう』の初日の夜に姿を見せていた。クラブ会員資格には年5シリングしかかからない。劇場はノッティング・ヒル・ゲイト駅から徒歩数分である。

#### ⑥『タイム・アンド・ Tide』1940年6月22日号<sup>(21)</sup>

#### 『茶色い服の少年たち』レジナルド・ベックウィズ作 ゲイト劇場<sup>(22)</sup>

思うに、ドラマというものはドラマティックであるべきなのだろうが、実在しない、あるいは説得力のない「出来事」<sup>アクション</sup>を使った劇がしばしば成功するというのは事実である。ショー氏の『良きチャールズ王の黄金時代に』はその一例である。そして『茶色い服の少年たち』は<sup>ポステル</sup>少年院を扱っている劇で、出来の悪い見え透いた筋書きに、優れたダイアログと斬新な主題を組み合わせるのだが、これももうひとつの例だ。

少年院の制度は犯罪防止にあまり役立っていないようだ（覚えておられるだろうが、ダートムアの暴動〔1932年〕は、少年院上がりの囚人たちが主導したのだった）。しかし、少年院経験者が少年院を回想する場合、元囚人が刑務所について話すよりも、辛辣さの度合いがはるかに少ないことは注目に値する。ベックウィズ氏の描く情景はほとんど友好的なものだ。少年院の施設長は人道的で知的な人物であるのみならず、犯罪の根本原因を完全に理解し、また自分の仕事には本質的に望みがないこともわかっている人物だ。補佐員たちは一般に考えられているよりも優れた人たちだ。ただし、そのうちの一人は同性愛のことを耳にしたことがないようである——この種の施設ではそれを知らぬとはちょっとありえないのではなかろうか。そこでの規律には馬鹿げた

(21) *Time and Tide* Vol. 21, No. 25 (22 June 1940), p. 665. CW, vol. 12, no. 643, pp. 194-95.

(22) レジナルド・ベックウィズ (William Reginald Beckwith, 1908-65) は英国の俳優・劇作家。少年院を舞台にした本作『茶色い服の少年たち』(*Boys in Brown*, 1940) は1949年にモンゴメリー・タリー (Montgomery Tully, 1904-88) 監督によって映画化された。ゲイト劇場については注5を参照。

面もあるが、残忍なものではない。少年たちは監視を受けずに多くの時間を過ごし、スポーツや演劇部で率先して活動する機会を得たり、より有望な少年たちは専門的な技術を教わったりする。このシステムはパブリック・スクールをモデルにしている。実際、休日がないという点を除けば、パブリック・スクールと比べてそう悪くはないようだ。

ではなぜ少年たちは絶えず脱走を試みるのか。それはほかでもない、休日がないという、そのひとつの事実のせいである。世界でもっとも「進歩的」な刑務所であっても、依然としてそこは自由のない場所、異性から隔離された場所なのだ。入所している16歳から23歳までの少年のなかには既婚者もいて、厳格な規律とボーイスカウトの制服がどうしても耐えられないと思っている者が多い。脱走が成功したためしがないことを少年たちはよく知っているが、それでも年中脱走を計画している。そして脱走を試みるたびに、それが間接的に少年たちにはね返ってきてしまう。「新聞沙汰」になって、少年院の評判をいっそう落とすことになり、少年たちが入所期間を終えて社会に出る際に、就職がさらに難しくなってしまうからである。ベックウィズ氏の劇において、ぐるっと一回りして元に戻る顛末が見て取れる。最初の場面では品行がよくて見込みのある少年が、自分は「更生」できるのだと自信をもって施設を去っていく。6か月後、その少年は窃盗の再犯で戻ってくる。少年院出身者だと馬鹿にされ、職を転々としたあげくに無職になったのだという。一方、別の、さらに有望な少年は、とりわけ愚かしい脱走の試みに巻き込まれ、意図せずに殺人未遂事件を犯す。16歳ですでに筋金入りの犯罪者となった、もっと残忍な少年たちは、苦しむことがもっとも少ない連中だ。

劇の本筋は見え透いているのと同時に説得力がない——ついでながらベックウィズ氏に指摘しておきたいのだが、本で殴って人の頭蓋骨を叩き割ることは不可能である。とにかく八折り判では無理だ。しかしダイアログと人物造形は大変優れたものになっている。少年院のような場所にいかにもいそうだと思えるすべてのタイプが出てくる——賢明な治安判事に当たっていたら、犯罪がなかったことにしてもらえたかもしれない、才能ある善意の少年。コックニーのこそ泥は、しっかりと固定しておかないとなんでも盗むが、凶悪犯罪には手を染めないタイプだ。社会に恨みを持っていて復讐を狙っている若いチンピラ。<sup>グラス</sup>「草」（密告者）、同性愛者、「悪いことだと知らなかった」と言うレイプ犯の頭の弱い村の少年といったあたりだ。演技はほぼ例外なく見事である。ごく若い男の子たちをこれほど大規模なキャストとして集めることは非常に困難だったに違いない。とりわけ好演だと思ったのは、有望な少年だったのにほとんど破滅してしまうジャッキー・ノールズを演じたデレク・ブルームフィールド、コックニーのひょうきん者のスパロー・トンプソンを演じたトニー・ハーフペニー、そしていずれピストル強盗になりそうなケーシー役のジュリアン・サマーズだった。しかしコックニー訛りで話すことにとまどっていた一人か二人を除いて、役者はみなよかった。いまよりもっとましな時代であったら、この劇は確かにウェストエンドでの上演に値する。

⑦『タイム・アンド・ Tide』1940年6月29日号<sup>(23)</sup>『サンダー・ロック』ロバート・アードリー作 ネイバーフッド劇場<sup>(24)</sup>

いまは演劇プロデューサーにとって辛い時期であって、いまなお現れつつある新しい劇が、見つけにくい裏通りの小さな実験的な劇場から出現するということのも驚きではない。ネイバーフッド劇場は、ゲイト劇場、トーチ劇場、スレショールド劇場といった一連の劇場に一番最近加わったのだが、マイケル・レッドグレイブを主演に迎え、『サンダー・ロック』でその活動をスタートさせた。

『サンダー・ロック』は奇妙な劇である。幽霊やら政治やらがごた混ぜにされて、アメリカ風の会話で語られる(この劇の初演は、ニューヨークのグループ・シアターだった)。主人公はチャールストンという、人里離れた岩場の上に建てられた灯台守だ。90年前にその岩場で船が難破し船長と6人の乗客が亡くなっていた。1939年の世界から逃れるのに最良の方法として、まったくの人間不信から主人公がこの仕事を選んだことがすぐ見て取れる。彼は旧友のストーリーターと偶然に再会する。このストーリーターは日中戦争に空軍兵として死ぬ覚悟で出陣し同様な問題を解決しようとしている。だが彼と会っても、すべての行動が無駄であるという主人公の気持ちは変わらない。あらゆる生き物から距離を取りたいという願望が深すぎて、孤独を邪魔するのであればカモメでさえも撃ち殺してしまう。しかし2幕目になると、かなり奇妙なものではあるが、実際には灯台に仲間がいることが明らかになる。

そこから先はずっと、劇中で、主人公はある意味で一人である。というのも、他のすべての俳優が幽霊だからだ。もちろん、90年前にそこで溺死した7人の幽霊である。チャールストンが幽霊と話してみると、初めは、現実には生きている人間同様に無益でつまらないように思える。スウィフト流の「悲観的な」人生観が正しいことが立証されたようにも見える。しかしかなり唐突に、さらにもうひとつの事実が現われ、この亡くなった人たちの人生が全く無駄というわけではなかったということが明らかになっていく。望んでも手に入らなかったように見えたものが実現していたからである。1849年の基準から見れば1939年の世界はただすっかり悪い場所というわけではなかった。まっとうな考えをもつ人には展望は十分暗く思われるが、1849年に考えられたほどはひどくはない。1849年といえば、反動があらゆる場所で勝利を収めていたのだ。戦争を含め、私たちが現在直面している悪も、ハンセン病や腺ペストのように、消えていく可能性が十分にある。ほんの少し前であれば「自然の秩序」の一部のように見えていたものですら、ということだ。この認識に至ったところで幽霊たちは姿を消す。遺されたチャールストンは、現実の人生のあれこれへの関わりを続ける気に多少なる。

パーシー・パーソンズ氏とバーナード・マイルズ氏も特筆に値するが、レッドグレイブ氏の演技が抜きん出ている。特に現在のような殺伐とした時期には、この劇は見逃してはならない。ネ

(23) *Time and Tide* Vol. 21, No. 26 (29 June 1940), p. 691. CW, vol. 12, no. 645, pp. 200-201.

(24) ロバート・アードリー (Robert Ardrey, 1908-80) は米国の劇作家。『サンダー・ロック』(*Thunder Rock*, 1939) の初演はニューヨークのブロードウェイでグループ・シアター (Group Theatre) によってエリア・カザン (Elia Kazan, 1909-2003) の演出による。そこではヒットせず短期間の公演で終わったが、ロンドンで大ヒットした。ネイバーフッド劇場 (Neighbourhood Theatre) はサウス・ケンジントンにあった劇場。



イバーフッド劇場はサウス・ケンジントン駅から数分のハリントン通りにあり、クラブの会費はわずか半クラウン〔2シリング6ペンス〕である。

⑧『タイム・アンド・タイド』1940年7月13日号<sup>(25)</sup>

『チュー・チン・チョウ』オスカー・アッシー作、フレデリック・ノートン音楽 パレス劇場<sup>(26)</sup>

「オスカー・アッシーの不朽のスペクタクル」を見た聴衆のなかで、次のような疑問を抱いたのは私だけではないと思う。「この駄作がかつて5年間ロングラン上演したなどというのは本当にありえるのか？ もしそうなら、なぜなのか？」私の記憶に誤りがなければ、『チュー・チン・チョウ』は、以前のような豪華絢爛なスペクタクルではなくなっている。踊るダンサーの数は減っているのに体を覆う布は多くなっている。たしかにラクダは登場せず、ロバが一、二度登場するだけだ。それにしても、一夫多妻制を熱く訴える劇だとでも見なさないかぎり、このロマンティックにしたアリババの（耳に残る1、2曲を除いて、平均的なパントマイムよりはるかに劣っている）話が、現代の舞台で最大のヒット作であった理由を説明するのは難しい。一夫多妻制を訴える劇として見ると、人びとの「逃避」願望がはなはだ強かったときに、「逃避」の雰囲気を提供したとは言える。そして今回の興行が以前の興行と同様の成功を収めるかどうかは、おそらく現在の戦争が前回の戦争とおなじくらいの殺戮にまみれた停滞状況に陥るかどうかにかかっているのだろう。

『チュー・チン・チョウ』が初演された頃は、戦争が永久に続かない理由が特に見当たらないように思われた。銃後においては暮らしはほぼ正常に営まれていたが、ベルギーの海岸からスイスの前線に至るまで、明らかな結果が見られないまま殺戮が継続しておこなわれていた。男性は20歳になる前に粉々に吹き飛ばされる可能性が高いということが一種の自然法則として受け入れられていた。労働者階級の犠牲者は甚大であったし、パブリック・スクールの卒業生名簿を見るとわかるように、中流階級のひとつの世代が事実上一掃されてしまった。18歳の少年たちは学校から将校訓練所に直行し、その次の1年の内に死んでいた。しかしその1年が過ぎる前に、喜びに満ちあふれた休暇を1、2週間取れた。それも塹壕にいるあいだに未払いで積み立てられていた給与付きであり、その金を使うのを手伝ってくれる娘もたっぷりいた。兵士たちはフランドルの泥を軍靴につけたまま戻ってきて、トルコ式〔サウナ〕風呂に飛び込んだあと、クライテリオン〔ロンドンのピカディリーにある高級レストラン〕で夕食をとり、それから『チュー・チン・チョウ』

(25) *Time and Tide* Vol. 21, No. 28 (13 July 1940), pp. 735-36. CW, vol. 12, no. 656, pp. 215-16.

(26) 『チュー・チン・チョウ』(*Chu Chin Chow*) は「アリババと40人の盗賊」の物語を下敷きにしたミュージカル・コメディ。脚本、製作、演出オスカー・アッシュ (Oscar Asche, 1871-1936)、作曲フレデリック・ノートン (Frederic Norton, 1869-1946) により第一次世界大戦のさなかの1916年8月3日にロンドンの国王陛下劇場 (注86) で初演、5年間にわたり2238回という記録的なロングラン上演となった。1923年に映画化 (無声映画・生演奏)、1934年にトーキー映画にされた。1940年にロンドンで再演されたが (オーウェルの評はこれである)、80回上演されたところでドイツ軍の爆撃のために中止、それから翌1941年に再開され158回上演された。パレス劇場 (Palace Theatre) はロンドン、ウェストミンスター区ケンブリッジ・サーカスにある劇場。興行主リチャード・ドイリー・カート (Richard D'Oyly Carte 1844-1901) のためにオペラ劇場として1888-91年に建設された。1924年にミュージカル用の劇場として再開。3層で1450席ある。



を観に行った。その劇の魅力は、すべてのものが幻想的な非現実性を帯びていること、そして裸同然で素敵なクルミ汁の色に塗られた女性の群れから醸し出されていた。そこはネバーネバーランドであり「魅惑的な東方」であった。よく知られているように、どの男も50人の妻を持ち、<sup>ディヴァン</sup>長椅子に横になってザクロを食べている、そんな場所である。この俗悪なスペクタクルによって、滅びる定めの子の世代の青年たちは、決して手に入れることができないであろう安らぎや喜びといったものを、夢のように一瞬垣間見ることができた。『チュー・チン・チョウ』と同時期に本で大当たりしたのが『類人猿ターザン』だったということは注目に値することかもしれない<sup>(27)</sup>。扱ったモチーフは違うものだったが、その本とこの戯曲は、実人生とははなはだしくかけ離れているという点で似ていた。

このたびの『チュー・チン・チョウ』での演技について何か言えるとは思えない。だれもが豪華なローブを身にまとい、「ホラーサーンのアブ・ハサン」といったようなフレーズを声を揃えて言いながら歩き回るような劇に、実際のところ演技はない。書割と音楽とコーラスがあるだけだ。だれもが知っている音楽、コーラスは非常に魅力的で、バザールの場面は本物そっくりだ。ただし、東洋のバザールは通常、透けて見える衣服を着て踊っている娘たちの一群に5分ごとに邪魔されることはない。

#### 『妻たちの貸金』 マーガレット・ブランフォード作 トゥエンティエス・センチュリー劇場<sup>(28)</sup>

他人に干渉する未婚女性を進歩的なフェミニズム観で描いた軽喜劇。演技はまずまず。

#### ⑨『タイム・アンド・ Tide』 1940年7月27日号<sup>(29)</sup>

#### 『女は天使じゃない』 ヴァーノン・シルヴェイン作 ストランド劇場<sup>(30)</sup>

フィクションに描かれる有名な二人組はすべて、究極的にはドン・キホーテとサンチョ・パン

(27) 米国の作家エドガー・ライス・バローズ (Edgar Rice Burroughs, 1875-1950) の「ターザン」シリーズの第一作『類人猿ターザン』(*Tarzan of the Apes*) は1912年に雑誌に発表され、1914年に単行本化、1921年までに10巻を数えた。1918年には最初の映画化がなされた。

(28) トゥエンティエス・センチュリー劇場 (Twentieth Century Theatre) はロンドンのベイズウォーターのアーチャー街にあった劇場。1863年にヴィクトリア・ホール (Victoria Hall) として開館。1866年にビージュ劇場 (Bijou Theatre) と改称。1905年にはここでオスカー・ワイルド (1856-1900) の『サロメ』(*Salomé*, 1893) の英国での初演がなされた。1925年にセンチュリー劇場 (Century Theatre)、1936年にトゥエンティエス・センチュリー劇場と改称。1960年代に閉館し、アンティーク・ウェアハウスに転用された。

(29) *Time and Tide* Vol. 21, No. 30 (27 July 1940), p. 789. CW, vol. 12, no. 661, pp. 221-22.

(30) ヴァーノン・シルヴェイン (Vernon Sylvaine, 1896-1957) は笑劇を得意とした英国の劇作家、映画脚本家。『女は天使じゃない』(*Women Aren't Angels*, 1940) は喜劇俳優ロバートソン・ヘア (Robertson Hare, 1891-1971) とアルフレッド・ドレイトン (Alfred Drayton, 1881-1949) の名コンビを配したシルヴェイン作品のひとつ。1940年7月18日から9月9日まで併せて61回上演された。その後1943年に映画化されヒットした。ストランド劇場 (Strand Theatre) はロンドン、ストランド街オールドウィッチにあるノヴェロ劇場 (Novello Theatre) の旧称。1905年にウォルドーフ劇場 (Waldorf Theatre) として開館し、1909年にストランド劇場に改称。1911年から2年間ホイットニー劇場 (Whitney Theatre) と改称されたが、1913年にストランド劇場の名に戻された。2005年にウェールズの作曲家、劇作家、俳優のアイヴァー・ノヴェロ (Ivor Novello, 1893-1951) を顕彰してノヴェロ劇場と改称して現在に至っている。収容定員は1146人。

サ、シャーロックとワトソン、ブヴァールとペキュシェ、ジーヴスとパーティ・ウースター、フォルスタッフとヘンリー5世の変種<sup>ヴァリエント</sup>にすぎない。——これは何度も繰り返されて来た構図であり、見る角度の数も無限にあるように思える。トム・ウォールズ、ラルフ・リン、アルフレッド・ドレイトン、ロバートソン・ヘアがみな現役で共演していたころ、ロバートソン・ヘアは、二人組のなかでよりあからさまに間抜けな方の役だったラルフ・リンのおかげで演技が際立っていた。本作ではその絵のなかでロバートソン・ヘアとアルフレッド・ドレイトン<sup>ファルス</sup>だけしかおらず、設定はもっと郊外になっている。このような笑劇作品について言うてよければ、わずかばかり蓋然性が増している。ラルフ・リンがパーティ・ウースター型の人物であるのに対して、ロバートソン・ヘアはむしろワトソン型に近い。非の打ち所のない納税者でありながら困窮している人物、平信徒の伝道者でありながらノミ屋で働く男、また模範的な夫なのに、若い女性の目に虫が入ったのでそれを取ってあげているときにかぎって妻がドアを開けて入ってくる、そんな人物なのである。これは何度も繰り返されるおなじ趣向なのだが、これが失敗することはめったに、というか絶対にない。なぜなら、鼻眼鏡と禿げ頭だけでなく、身体のどの所作を取っても、ロバートソン・ヘアは美德の鑑そのものに見えるのであり、美德の人がトラブルに遭遇するのはいつだって滑稽だからである。

劇は通常<sup>ファルス</sup>の笑劇の規則に従っている。だれもが常に自分の評判を落としかねない状況にあり、他人のふりをして逃げ出す。ロバートソン・ヘアとアルフレッド・ドレイトン——劇中の名前はポップデイとバンドル——は、人里離れたカントリーハウスで週末を過ごしている。その主たる目的は、アルフレッド・ドレイトンが何通かの不名誉な元愛人から手紙を取り戻すためだ。その元愛人は、嫉妬深いフランス人と結婚したばかりである。その嫉妬深いフランス人夫は熱心に探しており、そのすぐ後ろには、共謀者二人の妻たちがいる。その二人の妻はA.T.S.〔国防婦人部隊〕とW.R.N.S.〔英国海軍婦人部隊〕の将校であり、その装いが板に付いている。たまたま、敵のスパイたちがその家を根城に使っていて、下着の一着に秘密のメッセージを書いたことがわかっている。夜になり、軍事情報部の諜報員たちが家に押し入り、家中の服をすべて押収する。そのため、非常に恐ろしい妻たちが現れたとき、二人の男性と一人の娘はパジャマ姿でいる。もちろん、他にも多くの悶着の種がある。ロバートソン・ヘアがオムレッツを作ったり、地域のL.D.V.〔国防義勇兵〕の手にかかって殺されかけたのをかろうじて逃れたり、キルトを身につけたりする——ついでに「彼らは〔キルトの〕下に何かを着ているか否か」というかの有名な問題を解決する——、しまいには妻の制服を着込んで変装する。すべての警報と出撃を連隊のコンサートのリハーサルであると取り違えた間抜けな少佐も登場する。言うまでもなく、「姦通と下着」というモチーフが品位を保つぎりぎりのところまで、時としてそれを少々逸脱して推し進められ、観客を喜ばせる。

ロバートソン・ヘアとアルフレッド・ドレイトンが主役を務めるこうしたたぐいの笑劇<sup>ファルス</sup>では、他の俳優の出る幕はあまりない。その他の役のうちで最高だったのは、雑役婦役のミス・エセル・コールリッジと、間抜けな少佐役のロイド・ピアソン氏だった。このようなご時世に、このような気楽な劇が上演されているのを見るのは良いことだ。それも結構な費用をかけている。爆弾が落ちなくなればロングラン上演は間違いないだろう。

⑩『タイム・アンド・タイド』1940年8月3日<sup>(31)</sup>『悪魔の弟子』ジョージ・バーナード・ショー作 ピカディリー劇場<sup>(32)</sup>

『悪魔の弟子』はショーがこれまで書いたなかで最高の劇なのかもしれないが、キャストが大勢必要であることが主な理由となって本来上演されるべき回数ほど上演されていない。現下の状況でのこの劇の上演は果敢な試みだが、見たところ、それが正しかったことが示されつつある。初演から二日目の夜というのは常に劇の命運を決する重要な夜なのだが、この日、劇場は立錐の余地もない超満員で、非常に熱気につつまれていた——いささか熱狂的すぎるくらいだった。というのも、本当に芝居の間中かなり拍手が多かったためである。そのような拍手の習慣というのは、50年前のふた晩目にショー氏自身が正当にも抗議をおこなったものだった。

この劇は本質的にメロドラマであり、「正体を現す」人物に多くを負うたぐいのメロドラマである。性格も評判も正反対の二人の男性が、決定的な瞬間に突然仮面を脱ぎ捨て、いずれもじつはもう一人の人間であったことを明らかにする。ニューイングランドのある一家の長男であるディック・ダジョンは、偽善的なピューリタニズムの恐ろしい雰囲気の中で育ち、悪魔の崇拝者であると宣言することでその恐ろしい雰囲気に対抗してきた。カルヴァン主義者の神は実際にあらゆる点で非常に邪悪であるため、神の属性を単に逆転させるだけで、許容しうる神を創造しうる。罪深いディックに対抗するのは、地元の長老派教会の牧師であるアンダーソンだ。この人物はどこからどう見ても聖人のようだ——中年になってかわいい妻を娶った、がっしりとした体格の持ち主であること以外は。劇の背景となる時代はアメリカ独立戦争の頃である。突然、英国兵が牧師館に到着する。彼らは一人の反逆者をみせしめとして絞首刑にするように命じられており、牧師を絞首刑にすればとりわけ強い教訓を与えられると予想された。そして、巧妙に仕組まれたある間違いによって、英国兵はアンダーソン氏でなくディック・ダジョンを逮捕してしまう。ちょうどここで、筋金入りの悪人のつもりでいたディックは、自分が結局は悪人でなく、むしろ殉教者のような人物であると気づく。ディックの気持ちとしては、首から縄を外してそれを別の男に掛けることなどできないのだ。それでディックは兵士たちに身元を明かさずに自分を連れ去らせる。しかし、聖職者アンダーソンも自分の性格をひどく誤解していたことがわかる。彼は聖人ではなく行動の人なのだ。何が起ったのか分かったあとでも、アンダーソンはすすすすとただ名乗り出てディックの代わりに絞首刑になろうとはしない。代わりに、馬に飛び乗り、最も近い反乱軍の隊列まで駆けていく（メロドラマでおなじみの時間に挑む道行きである。これが映画であれば、おなじような白馬がおなじような地面を駆ける映像が見られるだろう）、そして反政府勢力からバーゴイン將軍への使者に与えられるものであることがわかっている安全通行権を手

(31) *Time and Tide* Vol. 21, No. 31 (3 August 1940), pp. 808–9. CW, vol. 12, no. 663, pp. 223–24.

(32) ショーの戯曲『悪魔の弟子』(*The Devil's Disciple*)は3幕の劇で1897年に初演。1901年に戯曲集『ピューリタンのための三つの劇』(*Three Plays for Puritans*)に収録。邦訳は「悪魔の弟子」中川龍一訳、『バーナード・ショー名作集』白水社、1966年。ピカディリー劇場(Piccadilly Theatre)はロンドン、ウェストミンスター区のデンマン街にある劇場。1929年に開館。3層で1232席。1940年の同劇場での『悪魔の弟子』の再演は7月24日から9月10日まで併せて54回上演された。オーウェルが観劇したのはレビューの文面からして7月25日(木)だったということになる。

にいれる。それから、ディックが絞首台に首を乗せられているちょうどそのときに到着し、名乗り出て、安全通行権を提示する。アンダーソンは自分が教会の職を辞し、スプリングフィールド民兵隊の隊長として新たに生活を始めるところだと説明する。ディックのその後について説明はされないのだが、牧師になるのではないかと思う。

この機知に富んだウェル・メイド・プレイを見て、背景となった時代設定にどれだけ助けられているかと考えざるをえない。1880年代後半または1890年代初頭には、戦うべき社会規範がまだあり、ただの馬鹿馬鹿しいことや暴露話から良い本や劇を作ったりできた。今日では、ショー氏がかくも熱烈に崇拝している新たな正統的教義を除いて、暴露すべきものは何も残っていない<sup>(33)</sup>。奇妙にも皮肉なことに、ショー氏自身が、『悪魔の弟子』の二人の主人公と非常によく似た心理的な「正体を現す」経験をするようになった。一見反逆者に見えたとしても、実際には権威主義的国家の使徒だったのだ。当然ながら——当時それは当然のように思われたのだろう——ショー氏はイギリスに対抗している側、アメリカ入植者の側にいる。ショー氏の最良の作品はすべて、1890年から1914年の時期に属する。大人へと成長する頃に起こったことや、理解したことを題材にしていたとき、まさしくピューリタンの金づくの社会でのまやかしを題材にしていたときであった。反抗に値する強固なものがあつたのであり、彼は人びとの記憶に残るかたちで反抗したのだった。

ディック・ダジョン役のロバート・ドーナット氏はディック・ダジョンという役を十分に理解し、さらに良く見せるように演じた。しかし、私見では、いささか演技が乱暴になりすぎているように思う。アンソニー・アンダーソン役のロジャー・リヴシー氏は絶妙だった。聖職者の雰囲気かなぐりすて、馬と拳銃を寄せと叫ぶ劇的な瞬間は——うまくやるのが難しいシーンだったが——申し分なく説得力があつた。女性陣はそれよりは満足度が低いものだったが、女性の人物たちはかなりつまらない役柄だったということがあり、アンダーソン夫人（ミス・ロザマンド・ジョンが演じた）は筋に実際には必要ではない、失敗に帰する情事によって複雑なものにされている。ミルトン・ロスマー氏はバーゴイン將軍役を好演した。この登場人物は、ロンドンで、黒幕によって戦いに負けていることに気づかされるのだが、有能な指揮官であり、第2幕でもっともすぐれた台詞はすべて彼から発せられる。「イギリス兵は英国陸軍省以外なら何にでも耐えられる」という発言は、軍服姿がちらほら混じった観客席から大いに称賛を浴びたのだった。

(33) ここでオーウェルが「ショー氏がかくも熱烈に崇拝している新たな正統的教義」とは、共産主義インターナショナル（コミンテルン）的なイデオロギーを示唆している。晩年のショーはスターリン体制下のソヴィエト体制を擁護し称賛する立場に立っていた。



⑪『タイム・アンド・タイド』1940年8月10日号<sup>(34)</sup>『許容誤差』クレア・ブース作 アポロ劇場<sup>(35)</sup>

この劇は面白く、まずまずドラマティックな作品ではあるものの、上演の時期を逸したとみなさずにいるのは難しい。殺人にまつわる陳腐な謎解きを優先して心理的に興味深い状況が無駄にしており、戦前の『ニュー・ステイツマン』風の「反ファシズム」劇であるにもかかわらず、ファシズムの本当の恐怖を何も伝えていない。まったく異なる思考レベルに属する2つの思考がただ混ざっていて、台詞の巧妙さにもかかわらず融合していない。

ニューヨークのドイツ領事館が舞台である。ジョークのつもりで、さらに一般的な感情に配慮して(これは事実に基づいているが)、当局は領事館を警備する警官はユダヤ人にとすると発表した。警官と警官が守っている人間との間では、ある程度の接触は当然避けられない。ここで、潜在的に、劇の冒頭部分はこれから本当に面白くなるのではないかと期待させるもので、「犯人捜し」型の殺人ものに流れてしまう必要はまったくないと思われる。というのも、この冒頭の状況には私たちの時代の主要な難題が暗示されているからである。一人のユダヤ人が一人のドイツ人を保護するという単なるアイデアだけでも、民主主義の本質が含まれている。そして、相手をいじめる機会がない国での両者の接触は興味深いものになりうる。このナチ党員は、個人的な意味で「悪い」人である必要さえない。この劇は、深刻な政治的問題を背景にした性格劇となる可能性がある。

しかし、残念ながら、これらの可能性のどれもが、深く掘り下げられない。ナチ党員でもある領事は非常に「悪い」人間——株式仲買人や銀行の支配人としても通るような意味での悪い人間である。皮肉ないじめ屋で、まわりのだれもかれをも——妻さえも——脅している。アメリカ・ナチ党の指導者は、総統の制服を誇張気味に真似た制服を来て気取って歩く馬鹿者である。ちなみに、こうした行為がアメリカでは許されていると知るのは興味深い。ユダヤ人の警察官役はミュージック・ホールの芸人風だったし、残りの登場人物はでくの坊だった。第一幕の終わりでも、明確な「筋」は見えてこない。そして、筋を提供するために領事は第二幕目の終わりにさほど必然性がなく殺害される。その後、劇は政治に直接関係しているというふりをやめ、純粹たる探偵ものになる。ご存じの「書斎の死体」の話となるのだ。一人の男が殺され5人がそこにいた。それもみな何らかの動機がある。だれが殺したのか、その手口は何か。真相をばらしてしまうことはしないが、ここでのトリック、あるいはこれと酷似したトリックが、G.K. チェスタトンの探偵小説のひとつで以前に使われたことがあると指摘しておいてもよからう。

おそらく、劇の「メッセージ」は表向きには反ファシズムであるため、この劇は時勢を論評し

(34) *Time and Tide* Vol. 21, No. 30 (10 August 1940), p. 829. CW, vol. 12, no. 668, pp. 230–31.

(35) クレア・ブース (Clare Boothe, 1903–87) は米国の劇作家。政治家としても活躍し、米国下院議員 (1943–47)、イタリア駐在大使 (1953–57) などを歴任。『許容誤差』(*Margin for Error*) は米国ニュー・ジャージー州プリンストンで1939年10月に初演。英国の初演は1940年7月8日、バーミンガムのシアター・ロイヤルにて。アポロ劇場 (Apollo Theatre) はロンドンのウェストミンスター区シャフツベリー・アヴェニューにある劇場。1901年開館。収容定員は1950年時点で893人、現在は658人。アポロ劇場での『許容誤差』の上演は1940年8月1日から8月27日まで、(ほぼ1日2回上演で) 併せて45回上演された。



たものと見なされて、好成績を取められると思われるが、それには値しないものだ。ミス・ブースは、おなじような初期の設定からはるかに良い劇を作ることができたことだろう。演技は全体をとおしてすぐれていたが、ナチの領事役のエドマンド・ウィラードとユダヤ人警官役のハートリー・パワーだけが、もてる才能を発揮する機会を多く得ていた。

⑫『タイム・アンド・タイド』1940年8月17日号<sup>(36)</sup>

『私が死ぬ日まで』クリフォード・オデッツ作 スレショールド劇場クラブ<sup>(37)</sup>

クリフォード・オデッツの印象的な劇『私が死ぬ日まで』について論評するのに遅すぎるといふことはおそらくないだろう。これは厳密に言えば新作ではないが、ロンドンの演劇愛好家の観点からはすぐにそうなる可能性がある。スレショールド劇場で2週間ほど上演が続いているが、運が良ければ遠からずウェストエンドの舞台にのる機会を得るだろう。

これは1933年または1934年のベルリンに関する劇であり、初期の頃のナチスのテロルをかなり真実に近いかたちで描いている劇である。主人公は若いユダヤ人のバイオリニストで、地下活動をする共産主義者の労働者でもあり、恋人と一緒にいるときに突然逮捕される。しかしその女性は売春婦のふりをして逮捕を免れる。ユダヤ人バイオリニストの青年は秘密警察本部に連れて行かれ、拷問され、賄賂の申し出をされた後釈放され、その後しばらくして再逮捕され、拷問され、情報提供者としてナチス側につくようにと再度説得を受ける。なんとか拷問に耐えて口をつぐんでいるが、ゲシュタポはかなり巧妙に切り札を隠し持っている。ゲシュタポは主人公の青年が情報提供者であるとあちこちで公表する予定だという。主人公は半分逮捕された状態であるが、ぱりとした服を着せられ警察官に伴われて連れまわされる。ついには彼の同志たちが一人また一人とその告発が真実であると結論を下し、彼は密告者としてブラックリストに載せられる。一挙に青年は友人すべてから見捨てられる。しかし恋人の女性は党から主人公と話すことを禁じられても彼を信じ続ける。主人公は最初の逮捕で「私が死ぬまで」二度と平和を知ることはないだろうと言っていたが、それは真実であることが判明する。拷問、孤独、恐れ、そして麻薬の影響下で、主人公は自分の精神が萎えていくのを感じる。遅かれ早かれ、ゲシュタポは主人公を降参させ、彼は情報提供者になるだろう。それで主人公は銃で自死する。ちょうどいいタイミングで。おそらくこの行為によって主人公は名誉を取り戻すのかもしれない。

この劇が明らかに共産主義側の情報源を元にかかれていたというのは皮肉なことだ。現時点では共産主義の作家はこんなことを書く契約などしないだろう——実際、ほぼおなじ主題に関するいかなる演劇も、ナチズムが悪いといってもせいぜい「資本主義」と同程度で、少しはましなものでさえある、という教訓を伴うものでなければならないだろう。だからといってこの劇が無効になるわけではないが、社会的文書としては、数年は古いと言われてしまうかもしれない。本作はヒトラーがドイツ国民を完全には制圧していなかった初期の時代を背景にしており——ドイツ

(36) *Time and Tide* Vol. 21, No. 33 (17 August 1940), p. 789. CW, vol. 12, no. 672, pp. 235-36.

(37) クリフォード・オデッツ (Clifford Odets, 1906-63) は米国のユダヤ系劇作家。『私が死ぬ日まで』(*Till the Day I Die*) はニューヨークのプロードウェイで1935年に初演。スレショールド演劇クラブについては注18を参照。ここでの再演は1940年7月25日開幕。

にはまだ500万人の失業者がいた——そして1939年以前のほとんどすべての「反ファシズム」文学のように、ナチズムを明らかな偽物として表現するという間違いを犯している。劇中のだれも、ほとんど愚か者といえるある女性を除いて、真のヒトラー信奉者ではない。若いユダヤ人を尋問することになっている茶シャツ党员〔ナチ突撃隊員〕のある少佐は変装しているユダヤ人であり、言語道断の大尉を撃ったあとに自殺する。しかし、大尉自身は、たまたま一人でいる時など、犯さなければならないことへの恐怖で苦しんでいる。二人の若い茶シャツ党员の兵士は非常につまらない「赤」のパンフレットを読んでかなり興奮して恍惚状態になる。この劇から受ける全般的印象といえば、政権は不安定でおそらく長続きしないだろうというものである。地下闘争の様子も、どう見ても時代遅れである。秘密の地下室での会合、ドアを叩く合図、売春婦を装った女の子、風で撒かれことになっている薄葉紙<sup>うすようし</sup>に印刷されたリーフレットなど、通常の仕掛けはすべて使われている。遠からず私たちもおなじようなことをする可能性は十分にある。しかし、ゲシュタポが7年も活動が続けていて、しまいに独ソ条約〔1939年8月に結んだ独ソ不可侵条約〕に至ったいま、ドイツでは、はたしてこういったことがどの程度残っているのだろうか。

この劇の作者がマルクス主義のパンフレットの陳腐な言い回し（『プロレタリアの未来の夜明け』など）を使って登場人物に話をさせるのは、作者がその話し方を好むからか、それとも現実世界を見て描いているのか、定かでない。確かにそのような話し方をする人はいる。そしてその種の信条は、他の信条と同様に、人の胸に迫りうるものである。劇の第5幕はかなり感動的である。そこには非合法的な団体に属するような雰囲気がある。迫害された宗教団体のような雰囲気だ。劇全体を通して肉体的に残酷なシーンはひとつしかないが、それは早い段階で起こり、その記憶は他のすべてのシーンにつきまとう。それは茶シャツ党员の大尉がユダヤ人に手をテーブルの上に置かせ、突然ライフルの台尻で指を砕くシーンである。いささか恐ろしすぎるかもしれないが、舞台上で繰り上げられる他のシーンと比べてそう大したことではない（たとえば『リア王』でグロスターの目がくり抜かれる場面がそうだ）。そして過去7年間そのようなことが実生活でどれだけ起こったのか、それは神のみぞ知ることだ。演技は良いといえる。極上というほどではないかもしれないが、全体的に高い水準に達している。俳優のほぼ全員が20歳未満であるという事を思えば、これはいっそう印象的だ。

政府が宣伝目的で演劇を本当に助成している場合（最近郊外からロンドンに移ってきた別のある劇を助成しているとあちこちで噂されている）、これより良いものを選ぶことはほとんどできないと思う。現在、商業演劇の状況は絶望的だ。翌週に空襲が始まり、ロンドンの半分が避難するかもしれないというときに、だれが劇の上演に2万ポンドのリスクを冒すというのか。それでも劇場は存続すべきであり、人は劇を必要としており、政府みずからも劇を必要としていることに気づくであろう。そしておそらくある種の助成金が交付されることになるだろう。トーチ劇場、スレショールド劇場、ネイバーフッド劇場といった、ここ数年で生まれたいくつかの小劇場に助成金を交付するのは悪いスタートではないだろう。それらのほとんどはピカディリーから3ペニーでバスで行ける劇場である。劇を最初に制作するのに50ポンドあるいは100ポンドの費用でできる場所で、ウェストエンドで危険を冒す前にあらゆる種類の劇を試すことができる場所なのだ。

⑬『タイム・アンド・タイド』1940年8月24日号<sup>(38)</sup>

『自由を取り返せ』ウィニフレッド・ホルトビー作 ネイバーフッド劇場<sup>(39)</sup>

この劇は基本的には小説家の劇と言え、通常の劇作家よりも舞台装置が少なく、登場人物への関心かはるかに高くなっている。これはファシズムについての心理学的研究になっている。劇が示す知見が5年間に書かれたことを思うとより胸に迫る。当時は肝心な問題の多くが今日のように明確になっていなかった。

主人公——というか、とにかく中心人物——である〈イギリスの独裁者〉、アーノルド・クレイトンは、知識人であり、裕福な中流階級出身の男である。より紳士的なヒトラー、あるいはより知的なモズリーと言えるかもしれない。政治的批評としては単純にこう言えるかもしれない——その手の人間は総じて独裁者などにはならない、当世風のデマゴーグは、彼がたぶらかす民衆とかなり似た考え方と感じ方を持たねばならない、と。しかし、心理学的な観点からは、ヒトラーのような幻視者やムッソリーニのようなこそ泥のキャリアよりも、ずば抜けた頭脳の持ち主が腐敗するほうが興味深い。ここに見せられるのは転落する人物なのだが、彼は衝動を感じているだけでなく、自分が何をしているかを完全に把握している。専制をうまく確立する仕方についてというより、思慮深く感受性の鋭い人物がいかにして専制政治に丸め込まれてしまいうるか、これを掘り下げているのだ。

劇は6場からなる。それぞれの場面で独裁者は、見る人がどちらととらえるか次第で、梯子の一段上に上がるか、あるいは一段下に下がっている。権力を握る瞬間まで、主人公の経歴はモズリーの経歴に酷似している。クレイトンには、自分の「計画」、自分の私兵、秩序と規律についての自身の合言葉、自分のユダヤ人迫害があり、裕福な支持者たち、彼を崇拜する愚かな女性たちなどもある。名高いオリンピアの集会がモズリーのキャリアの転換点で、そこで彼はおそらく労働者階級の支持を得る機会を失ったのだが、その集会のことまで第3場で描かれる<sup>(40)</sup>。しかし第4場でクレイトンは実際に権力を握り、総選挙に勝利し、それに乗じて民主主義を廃止し、それ以降彼の本当の退廃が始まっていく。クレイトンは、他の多くの人が気づいたように、最高権力というものは単に一種の奴隷制にすぎないと気づく。とうの昔に、彼は〈計画〉のために誠実さを犠牲にしなければならなかった。しかしいまは、〈党〉のために〈計画〉を犠牲にし、ごく内輪の仲間たちのために〈党〉を犠牲にし、そしてしまいには、自分自身のために仲間たちを犠牲にする、という問題になっている。権力を握ることを自分の目的にしたために、彼は権力の

(38) *Time and Tide* Vol. 21, No. 34 (24 August 1940), p. 866. CW, vol. 12, no. 678, pp. 242-44.

(39) ウィニフレッド・ホルトビー (Winifred Holtby, 1898-1935) は英国の作家・批評家。遺作『サウス・ライディング』(South Riding) が代表作。戯曲『自由を取り返せ』(*Take Back Your Freedom*) も死後出版で、未完成の原稿を劇作家ノーマン・ギンズベリー (Norman Ginsbury, 1902-91) が加筆して仕上げ、1939年にジョナサン・ケイブ社から舞台演出家タイロン・ガスリー (Tyrone Guthrie, 1900-71) 編によって刊行された。小劇場のひとつネイバーフッド劇場については注24を参照。

(40) オズワルド・モズリー (Oswald Mosley, 1896-1980) は1932年にイギリス・ファシスト連盟 (British Union of Fascists; BUF) を結成。1934年6月7日にロンドン、ウェスト・ケンジントンのオリンピア (大規模収容の展示場) に1万5千人を集めるBUFの大集会を開いた際、会場に紛れ込んで抗議の声を上げる反対者たちに暴行を加えた。この騒動はBUFの暴力性を世間に広く知らしめることとなった。

囚人になっている。初期の頃は、知的正直さ、共通の品位といった「ブルジョア」的概念は、英国の再生と比べれば重要ではないと指摘するのはじつに簡単だった。「人は民衆のために死ぬのが適切である」という言葉を引用することを好み、個人的には、全体主義運動に必要とされている卑俗さに嫌悪感をいだいていて彼は告白する。ある程度までその主張は正しい。確かに、権力を持っていても本人が幸せになるわけではない。しかし、この種のマゾヒズムは、あらゆる等級におけるファシストや共産主義者にはかなり一般的であり、むき出しの権力崇拜の一形態にすぎない。結末は、親友たちが彼自身の重みを貶めるような政策を提案したのだから、彼らを唐突に射殺する。ほぼその直後に（これは巧みな筆致だが）、彼はみずからその政策を実施する。

これらすべてに混ぜ合わされているのは、クレイトンの私生活のドラマである。それは権力を握っていくありさまへの風刺ほど満足のいくものではないかもしれない。意識的ではないものの、まず彼は同性愛者である。しかし、彼の同性愛と病的なまでの権力欲の両方とも、幼児期のことで説明がつくことが次第に明らかになる。母親は「開明的」な女性であり、必要以上に長く息子を支配していた。息子の養育の最終結果を見て、母親は驚く。確かに、ヨーロッパの戦争を回避するために、ぎりぎりまで彼を暗殺することで劇を終えさせるのは母親ではある。しかし実際に彼をそのような人間に仕立て上げたのも彼女なのだった。息子をあまりにも長く支配し、入念に教育しすぎてしまったことによって、自分には独立した人格がないという感覚を彼に与えてしまった。最後に彼はそのようなことを告白する。ヒステリー状態に陥り、彼女に罵声を浴びせて、自分が〈イギリスの独裁者〉になったのはひとえにあなたから逃げるためだった、ついに大人になったのだと感ずるためだったのだと言うのだ。

『自由を取り返せ』は、ウィニフレッド・ホルトビーが亡くなった時点で仕上がっていなかったようで、その後ノーマン・ギンズベリー氏によって加筆された。この劇に依然として見られる大きな欠点として、あまりにもエピソード的だということがある。劇の結末であってもおかしくない場面が2つないし3つあるので、本当の終わりになっても、本来起こってしかるべきクライマックスにはならない。しかし人物造形は通常のレベルをはるかに超えている。なかでも最高の登場人物は、クレイトンの友人のロレンス少佐かもしれない。この人物はレームかゲーリング〔ナチ党の指導者〕の役割を担い——ゲーリングよりはレームのほうがだろうか——、最終的にクレイトンに射殺されることになる。この役は、マーティン・ウォーカー氏が見事に演じている。ちゃんとしたプログラムがないので（私が見た上演は単なるドレスリハーサル〔ゲネプロ〕だった）、すべての場合で俳優名と役を合わせられないのだが、クレイトン自身、彼の母親、そしてファシストの行進曲をこしらえる惨めな同性愛者<sup>パンジー</sup>はすべて、どの役も知的に演じられていた。ヒュー・ミラー氏は劇を監督し、ちよい役ではあるが繊細な役も大変うまく演じている。この劇は、その洞察において非常に注目値する。プロパガンダとして潜在的に非常に価値があるので、その前身である『サンダー・ロック』に続いてウェストエンドで上演されることが期待できる。



『栄養満点の体』 フランク・ローンダー、シドニー・ギリアット作 リリック劇場<sup>(41)</sup>

この楽しい小さな劇は、舞台というより、アメリカの詐欺師の映画に多く見られるような趣向で、スリラーと笑劇<sup>ファルス</sup>を融合させている。筋立て<sup>アクション</sup>の中心となるのは、ゲシュタポのスパイたちが、非常に温厚な英国人の助手を使って、一人の閣僚をばらそうと画策する話で、その閣僚は助けてやる価値がほとんどないような輩なのだが、当然ながら主人公によって救出される。殺人はうまくいかないとはいえ、きわだって巧妙に仕組まれている。アメリカ映画では犯罪の主犯格を捕まえるのは警察ではなく、頭の切れる若い記者ということになっていて、『栄養満点の体』の主人公もその伝統にしたがって、快活な青年で、自身で発明した掃除機を売り込んだり、ナチスを出し抜くあいまに求愛したりジョークを言ったりする人物である。偽装爆破装置とバルカンの政情に、詩、不倫、下着といった必ず笑いを取れるネタが混ぜ合わされている。そして、こうした混合がかなりうまくいっているので、この劇への観客の反応がかなり低調であったのがいささか驚きであった。演技は適切であり、主演のバリー・バーンズ氏はいつもどおり本領を発揮している。

⑭『タイム・アンド・ Tide』 1940年9月7日号<sup>(42)</sup>

『コーネリアス』 J.B. プリーストリー作 ウェストミンスター劇場<sup>(43)</sup>

悪夢から目覚めるのは常に喜ばしいものだ。たとえ空襲警報で起こされるとしてもである。いま私たちはまさに戦争の真っ只中にいるのだが、少なくとも不況の真っ只中にいるわけではない。爆弾が落ち、死者が出ている。だが失業手当を受け取る行列は短くなっており、自殺者も減少している。プリーストリー氏の劇は、わずか5年前の作品なのにすでに時代劇のようで、描いているのはドーデーさながらの死に絶えた世界なのだが、それでもつい昨日まではピラミッドくらい永遠であるように見えた世界なのだ。そこはお金の世界であり、不況とにわか景気、そして「厳然たる」経済法則の世界である。そこでは、堅実なビジネスマンが卑屈な破産者と化し、30年勤続した老事務員が路頭に迷い、投機家が株式相場の情報を一目見てガスオープンに頭を突っ込んだりする。今後数週間以内に私たち全員が粉々に吹き飛ばされる可能性は十分にあるが、このよ

(41) いずれも英国の作家、映画監督、映画製作者のフランク・ローンダー (Frank Launder, 1906-97) とシドニー・ギリアット (Sidney Gilliat, 1908-94) はアルフレッド・ヒッチコック (Alfred Hitchcock, 1899-1980) 監督の『見知らぬ乗客』(The Lady Vanishes, 1936) をはじめ、多くの映画脚本を共作で書いた。喜劇『栄養満点の体』(The Body Was Well Nourished, 1940) の初演はリリック劇場 (Lyric Theatre) にて1940年8月14日に初演。8月末までに21公演。リリック劇場はロンドン、ウェストミンスター区シャフツベリー・アヴェニューにある劇場で1888年開業。4層で当初は1300人ほどを収容していた (現在の収容定員は967人)。伝統的にミュージカルに強い劇場だが、ミュージカル以外の作品も上演している。

(42) Time and Tide Vol. 21, No. 36 (7 September 1940), pp. 907-8. CW, vol. 12, no. 684, pp. 250-54.

(43) 英国の作家、批評家のJ.B. プリーストリー (John Boynton Priestley, 1894-1984) は劇作家としても多作で30篇ほどの戯曲を書いている。『コーネリアス』(Cornelius, 1935) の初演は1935年3月11日、バーミンガムのシアター・ロイヤルにて。ウェストミンスター劇場 (Westminster Theatre) はロンドン、ウェストミンスター区のパレス街にある劇場。1766年建設の旧チャペルが1924年に映画館 (St James's Picture Theatre) とされていたのを1931年に改装してウェストミンスター劇場となる。収容定員は560人。同劇場での公演は1940年8月27日から同年9月7日まで併せて15回上演された。



うに消えた30年代を垣間見て、現在の戦争から何が出てきても、プリーストリー氏が描き出している恐怖が二度とおなじようには起こらないと考えると、本当にほっとさせられる。

この劇の中心人物であるコーネリアスは、アルミニウム輸入業の小さな会社のジュニアパートナーである。かなり繁栄した会社だったが、1ポンドの価値が12シリング6ペンス〔0.625ポンド〕に下落してしまうと、当然何もかもがうまくいかなかった。幕が開く時点ですでに事態は深刻な状況になっている。債権者会議が週の後半に予定されており、会社のシニアパートナーは、銀行に別の当座貸越を許可してくれるよう頼むのに十分な注文をまとめるという、ほとんどかないそうもない望みのために、北の方に行っている。一方、税務署の連中が、コーネリアスはその年のもっと前に受け取った少額の遺産を嗅ぎ回っている。オフィスは、カーペット、文房具、歯磨き粉を売ろうとしているガツガツとした惨めな人たちによって10分ごとにかき回されている。これは不況時にはおなじみの雰囲気だ。すべてがシニアパートナーのマリソンの用向きにかかっている。その任務が果たされることをみなが信じていると言うのだが、じつはそれが絶望的であることを内心ではみな知っている。そして債権者会議の前でさえ、マリソンからの謎の電報によってある種の悪寒がオフィスに投げかけられる。その電報では、彼が赴くところすべてに二人の男が尾行していると告げているのだ。

この劇にいくばくかの悲劇の性質を与え、1935年を1940年からこれほどまでに完全に切り離しているのは、この種のやみくもな商業的闘争、大勢のガツガツとした競争相手が、縮小し続ける市場を駆けめぐる状況での闘争が、自然の秩序の一部ではないことをだれも理解していないためである。これは精神的に他の人たちとは異なる部類に入るコーネリアスにも当てはまる。このようなことは近い将来消滅することになる私的資本主義の副産物であると指摘できる人が一人でもいるなら、会社の破産などほとんど問題にならないだろう。実際には、関係者全員が単に「成功」と「失敗」という観点から物事を見、自分たちの破産が少なくとも部分的には自分たちのせいであると感じている。小さい会社で、ほとんどの人びとは長い間一緒に働いてきた。もちろん、最良の時期でさえ、状況は理想的ではなかった。仕事の多くは退屈で、オフィスは暗くてぼろぼろである。雑用係の青年は「ガキの仕事」を嫌がり、コーネリアスは、内心ではビジネスに興味がなく、ペルーの失われた都市について白昼夢にふけている。そして不器量で野暮ったいタイプピストはコーネリアスにどうしようもなく恋焦がれている。それでも、会社の雰囲気は家族的なものだった。この会社が崩壊するとなればそれは世界の終わりということになる。そしてもちろん会社は崩壊していく——そのことは劇の冒頭から明白だった。

「ネズミ取りのような顔の」銀行支店長に率いられた債権者たちが集まって最悪の事態を起こしているちょうどそのときに、マリソンが戻ってくる。ほんのつかのま、マリソンが救いをもたらしたかのように見える。しかし、その時点ではだれもがいたずらだと思っていた謎の電報が、そうではなかったことがわかる。マリソンは気が狂ってしまったのだ。しばらく正気を取り戻しはしたが、10日後に彼は銃で自殺する。劇は最終的に会社が解散して終わる。コーネリアスは臨時雇いの秘書に恋をしていたが、秘書には、額に巻き毛を垂らしている若い鼻持ちならない野心家の婚約者がいた。もうオフィスではなくなった部屋にコーネリアスは一人でいて、マリソンの拳銃で自殺しようとする。そのとき、外から手回しオルガンの曲が聞こえ、我に返る。辞書で窓

を割り、ペルーの失われた都市を見つける旅へと彼は出発する。

劇の多くの部分は言葉では言い表せないほどわびしい。しかし主題を考えると、プリーストリー氏が不必要に恐ろしいことをてんこ盛りにしていると非難することはできない。実際、ほとんどの登場人物は、不況の時代であつたらおそらくひどい境遇におちいったことだろうが、そうならずにかなりよい状況で最終場面を迎える。古参の会計士は、服飾小間物店を営む娘婿がいて、共同経営をするのに十分なお金を貯めている。雑用係はラジオ販売店に勤めるチャンスを得る。器量のよいタイピストは婚約しており、不器量なほうには再就職する自信がある。その悲劇は、自分が育った社会以外の社会体制を想像することができなかったことに存する。30年代はじめの数年をとおして、これと同様のことが起きていた。あの頃は中小企業が雑草のように容赦なく除去されていた。ああいった事態を記録しておくのは正しいことだった。みなを元気づける作家に容易になれたはずのプリーストリー氏が、当時の人びとが「気が滅入る」（あるいは「暗い面を見ている」）と言って拒絶した戯曲を何作か書くことを選んだという事実は、彼の誠実さの証である。おそらくプリーストリー氏は、この戯曲が——戯曲としてではなく、社会の記録文書として——すでに時代遅れになっていることをこのうえなく嬉しく思っていることだろう。

この劇には、ひとつふたつ、人物設定で非常にすぐれたタッチが見られる。ロバート・ウィルトン氏が演じた役は太った販売外交員のタイプであるが、私たちのほとんどが鉄道客車に乗ってくつろいでいるのとおなじくらい、債権者会議に出ていても場違いでない人物である。この役は、緻密に人物像が作られている。演技は個々に素晴らしいとは言わないまでも、全般的によかった。実際には劇中の話ではないのだが、ある事件があって、社会史のひとつまとして記録する価値があるかもしれない。火曜日の夜（〔8月〕27日）の公演の半ばに差し掛かったころ、空襲警報が鳴った。コーネリアス役を演じていたスティーヴン・マリー氏が前に出て、明かりをお付けしますので、お外に出られたいお客様はどうぞお立ちくださいと言った。それで退場した客は3、4人ほどで、劇はいつもどおり進められた。爆撃が始まってわずか一週間しか立っていないのだが、もう空襲警報は深刻には受け止められなくなっていた。したがってロンドンの劇場の今後の見込みは、数週間前に予測されたものよりもかなり明るいのではないだろうか。

#### 『アップルソース』 ジョージ・ブラック司会。ハウボーン・エンパイア<sup>(44)</sup>

本当に卑俗な出し物を見たい人は、ハウボーン・エンパイアに行ってみるとよい。ここでは3シリング出せばマチネでかなりよい席が得られる。もちろんマックス・ミラーが最大の呼び物だ

(44) ジョージ・ブラック (George Black, 1890-1945) は1930年代から40年代にかけて活躍した英国の興行主。ハウボーン・エンパイア (Holborn Empire) はロンドン、カムデン区ハイ・ハウボーンにあったミュージック・ホール。1857年にウェストンズ・ミュージック・ホール (Weston's Music Hall) の名で開業。1906年にハウボーン・エンパイアに改称。2000席あった。レビュー『アップルソース』(Applesauce) は1940年8月27日に開幕。折しも「ブリテンの戦い」(Battle of Britain) が始まった時期のことだった。人気を博して長期興行となったが、1941年春に空襲で被災したため同ホールでの公演は休止に。ロンドン・パレディウム劇場(注7を参照)に移されて1941年3月5日から11月29日まで462回の公演がなされた。ハウボーン・エンパイアはさらなる空襲で被害を受け、その後再開されることなく1961年に解体された。

が、前座で素晴らしい寸劇を見せる場合がある<sup>(45)</sup>。これらのなかでとびきりのものは、ホームガード国防市民軍を描いた寸劇であり、期せずしてこの顧みられていない団体についてのよい宣伝になっている。ドリス・ヘアはストリップショーの一場についての寸劇を演じ、ドリノフス・アンド・ラーヤ・シスターズはなかなかよいアクロバットを見せる。そのうちのひとつは『風変わりな店』<sup>(46)</sup>のミュージック・ホール版である。もうひとつは光を使ったイリュージョンで、これはおそらく降霊会での「マニフェステーション霊の出現」に何らかの光を当てるものだろう。

マックス・ミラーは、燕尾服をまといピカピカのシルクハットをかぶると、これまで以上にミドルセックス街の行商人のように見える<sup>(47)</sup>。彼は人生のサンチョ・パンサ的側面、真の低俗さを専門としてきたイギリスのコメディアン<sup>(48)</sup>の長い系列に連なる一人なのだ。これをおこなうには、おそらく高貴さを表現するよりも多くの才能が必要だ。リトル・ティッチはその達人だった<sup>(48)</sup>。リトル・ティッチがよく演じていたミュージック・ホールの笑劇<sup>フアルス</sup>があった。そこでティッチは悪徳弁護士の雑役係の役柄に扮した。弁護士は次のようにティッチに指示を与えている。

「さて、今朝やって来る依頼人は未亡人で、なかなかいい女だ。おまえ、わしについてくるかな？」

リトル・ティッチ「いえいえ、お先にまいります」

たまたま、私はこの笑劇で、おなじ役を他の役者が演じるのをいくつか見てきたが、リトル・ティッチがこの単純な台詞に込めるまったくの下品さになうような演技ができた者を見たことがない。マックス・ミラーにもおなじ性質を感じさせるところがある。彼らが人に与える笑いとは別に、そのようなコメディアンが存在すること自体が大事なのだ。私たちの文明において価値があり、特定の状況では抜け落ちてしまうかもしれない何かを芸人たちは表現しているのである。そもそも、彼らの才能は完全に男性的である。女性が低俗な芸をするとむかむかするものになってしまうのだが、それに対して、優れた男性コメディアン<sup>(48)</sup>の場合は、救いようがないけれど、雀のように純粹無垢だという印象を与えることができる。それにまた、彼らは強烈なまでに国民的である。時代遅れの階級区分があるにもかかわらず、英国の文明がいかに緊密にひとつに結び合わされているか、それがいかにひとつの家族に似ているか、それをこの芸人たちは思い起こさせてくれるのだ。『アップルソース』に出てくる驚くべき猥褻さは、観客が共通に持っている背景から「二重の意味 (double entendre)」で表現されていることで初めて可能になっている。『ピ

(45) マックス・ミラー (Max Miller, 1894-1963) は20世紀前半の代表的なミュージック・ホール芸人。「チーキーチャッピー」(the Cheekie Chappie) の愛称で親しまれた。

(46) 『風変わりな店』(La Boutique Fantasque) はロシア・バレエ団 (Ballets russes) が1919年に初演した1幕からなるバレエ。

(47) ロンドン、シティのミドルセックス街は市場があって呼び売り商人の声で賑わう。

(48) リトル・ティッチ (Little Tich, 1867-1928) はミュージック・ホール芸人。本名ハリー・レルフ (Harry Relph)。

ンク・アン』<sup>(49)</sup>を見て育った人でなければこの肝心な点を見逃すだろう。マックス・ミラーのようなコメディアンが舞台に立ち、それとほぼおなじような人生観を表現した色刷りの漫画絵葉書が文房具屋の窓に飾ってあるかぎりは、英国の民衆文化が生き残っていることがわかるのだ<sup>(50)</sup>。一方、『アップルソース』は一流のヴァラエティ・ショーであり、「魅力的な」歌は笑劇の合間にごくわずかはさまれるだけである<sup>(51)</sup>。

# 『異国への旅立ち』ニュー・シアター<sup>(52)</sup>

高邁な劇で、ほとんど論評に値せず。

## ⑮『タイム・アンド・タイト』1941年1月4日<sup>(53)</sup>

### 『ウィンザーの陽気な女房たち』（短縮版）ウィリアム・シェイクスピア作 ストランド劇場<sup>(54)</sup>

ランチタイムのシェイクスピア上演は、一見してそう思えるよりも良いアイデアである。シェイクスピア劇はどれだけ短くしても（今回の『ウィンザーの陽気な女房たち』の上演でも約1時間半かかる）、平日にかなりの穴を開ける。観客の大多数は自発的に昼食を食べないと決めた人だという可能性が高い——つまり、シェイクスピアが好きな人たちである。これは歓迎すべき変更であり、役者にとってはたいへんありがたいことであるに違いない。ストランド劇場のオープニング公演の観客はそれほど多くなかったが、ギャグではなくジョークに笑い、役者が散文の幕間を猛スピードでわめき散らしてめいっばい馬鹿騒ぎをさせるように仕向けたりしない——シェイクスピア劇でそんな観客にお目にかかったのはこれが初めてだった。

シェイクスピア劇はどれもカットしてしまうと損なわれてしまうもので、『ハムレット』でさえそうなのだが、『ウィンザーの陽気な女房たち』は大方の作品と比べてそれほど損なわれずに

(49) 『ピンク・アン』(*Pink Un*) は1865年創刊の英国のスポーツ週刊紙『スポーティング・タイムズ』(*Sporting Times*) の通称。ピンク色の用紙を使っていたことからこの名が生じた。1932年に廃刊。

(50) ここで言及されている「色刷りの漫画絵葉書」(the comic coloured postcards) はドナルド・マッギル (Donald McGill, 1875-1962) の漫画絵葉書を指している。これについてオーウェルは彼の民衆文化論の代表的なエッセイ「ドナルド・マッギルの芸術」(*The Art of Donald McGill*, 1941) で詳細に論じている (CW, vol. 13, no. 850, pp. 23-33)。そのエッセイのなかで、「サンチョ・パンサ的人生観」の典型としてマックス・ミラーも言及されている。

(51) 「魅力的な」歌 (“glamorous” songs) とは英国の人気歌手ヴェラ・リン (Vera Lynn, 1917-2020) の歌曲を指す。リンは『アップルソース』でマックス・ミラーと共演しており、この二人がこの演目の二大看板だった (see Lynn, p. 138)。

(52) オーウェルはここで作者名を記していないが、『異国への旅立ち』(*Outward Bound*, 1923) は英国の劇作家サットン・ヴェイン (Sutton Vane, 1888-1963) 作。1923年9月7日にロンドンのエヴリマン劇場 (Everyman) にて初演。17日に初演。初演時はかなりの成功を取めた。ニュー・シアター (New Theatre) については注3を参照。『異国への旅立ち』のニュー・シアターでの再演は1940年8月30日から9月7日まで、併せて11回上演された。

(53) *Time and Tide* Vol. 22, No. 1 (4 January 1941), pp. 10-11. CW, vol. 12, no. 742, pp. 360-62.

(54) ストランド劇場 (Strand Theatre) については注30を参照。同劇場でのシェイクスピア作『ウィンザーの陽気な女房たち』(*The Merry Wives of Windsor*, c. 1597) の短縮版は1940年12月23日から12月28日まで、および1941年2月1日、併せて8回のマチネ公演がおこなわれた。



済む。このストランド版では「<sup>ラヴ・イン・タレスト</sup>愛の関心」が削除されているが、これはそれほど大きな損失ではない。シェイクスピアの他のウェールズ人のように退屈なウェールズ人も出ているが、その役の出番は大幅に切り詰められている。それよりも残念なのは、ニムがカットされ、ピストルとバードルフが一人のキャラクターに統合され非常に小さな役にされてしまったように思われることだ。こうすることによって、劇の序盤が大幅に短縮されることになり、またウルフィット氏<sup>(55)</sup>の解釈も、短縮しなかった場合に予想されるものとはちがったものとなっている。伝えられているところによれば、『ウィンザーの陽気な女房たち』はエリザベス女王の命を受けて1週間で書かれたとされており、そこに出てくるフォルスタッフは『ヘンリー四世』のフォルスタッフとは別人であるとして異議を唱えられることがよくある。確かにプロットの要請によってフォルスタッフは信じられないほど愚かな振る舞いをする。とにかくフォルスタッフは「プロット」などに決してかかずらうべきではないたぐいのバーレスク的な人物である。とはいえ、冒頭のシーンでは、フォルスタッフは昔のままの人物であり、彼とピストルのどちらもがとびきりの台詞を発する。フォルスタッフ役のウルフィット氏は、赤い鼻で太鼓腹をした姿でおきまりのスラップスティック調で彼を演じているのだが、それは間違いだ。フォルスタッフは太っちょで、太っちょは繊細な感情が欠けているとよく言われている。フォルスタッフはまた不誠実で臆病でもあり、「<sup>ウィット</sup>他人の洒落の種」〔『ヘンリー四世』第二部1幕2場〕である。しかし、それでいて非常に知的な男であり、シェイクスピアの登場人物のなかで「知識人」と表現しうる数少ない人物の一人である。いつの日か俳優がこれを認識し、ハムレットを演じる際に通常払われるのと同程度の注意を払ってフォルスタッフを演じるなら、素晴らしいことだろう。フォルスタッフは常に散文で話すが、それはきわめて詩的な散文である。ピストルが語るのは戯言ばかりだが、純粹に音楽的な理由で、彼の台詞のいくつかはシェイクスピアが書いた最高の部類に入る。それにもかかわらず、フォルスタッフの登場する場面の詩情はけっして伝わらない。そうした場面を非常に低俗な笑劇として扱い、酒瓶を放り投げたり、しゃっくりをしたりすることなどによって、精一杯景気づける、などという真似をしてしまうためである。ウルフィット氏の演技にはそうしたいつもの欠点が見られたが、通常ほどには目立っていなかった。少なくとも、台詞が観客の耳に届くように発せられていたし、名高い「俺がロハでこの魂を危険にさらすとしても思っただのか？」〔2幕2場〕という台詞で観客の笑いを取っていた。ふつうの観客であつたら笑いは起こらなかったことだろう。

二人の陽気な女房をミス・ヴァイオレット・ヴァンプラとミス・アイリーン・ヴァンプラが好演していた。二人の女房のうちフォード夫人のほうがわずかによい役回りなのだが、二人の女優は甲乙つけがたかった。夫役の二人、ナイジェル・クラーク氏とフランク・ドルー氏は、あまり報われることのない役回りを卒なくこなしていた。とはいっても、「cuckold」〔寝取られ男〕という語を“but”のuのように発音している点については異議を唱えておきたい。明らかに、この語は“cuckoo”〔カッコウ〕と何らかの関係があるはずだ。ウィンザーの森の最終場は非常にシ

(55) ドナルド・フルフィット (Donald Wolfit, 1902-1968) は英国の俳優、演劇マネージャー。第二次世界大戦中に英国各地でシェイクスピア劇の巡業をおこなった。



ンプルに魅力的に演じられ、劇の伴奏音楽は大方が魅力的なものだった。

ストランド劇場が十分な収益を上げてランチタイムのシェイクスピアを継続していけることを願う。選りすぐりの観客であることがかなり確信できるので、「短縮版」の先へと思いついて進み、あまり知られていない劇のいくつかから数場面を切り取って上演してみるというのもよいかもしれない。上演されたためしのない『アテネのタイモン』には、シェイクスピアの戯曲の他のいずれをも凌ぐ詩が含まれている。『ヘンリー四世』の居酒屋の場面でさえ、10年かそこらに1回しか日の目を見ていないうえ、思いやりのない観客の前で常に誤った扱いを受けている。こうした断片をつなぎ合わせた作品を、それを見る特権のために大急ぎでサンドイッチを食べて駆けつけてくれるような人たちを相手に上演することができたら、空襲もそれなりに役に立ったと言えるだろう。

『パークリー・スクエア』 ジョン・L. ボルダーストーン、J. C. スクワイア作 ヴォードヴィル劇場<sup>(56)</sup>

非常に感傷的な劇の再演で、基本的なアイデアはよいが、エンディングが弱い。主人公は18世紀に「戻り」、それから150年後に目覚め、消えた過去なかで恋に落ちて1786年に悲嘆のあまり死んだ娘の墓石を見て涙に暮れる。主演者として、ミス・ジーン・フォープス＝ロバートソンが好演していたが、アンドレ・ヴァン・ギゼゲム氏のほうは、せっかくの巧みな演技がかなり見苦しい身ぶりによって損なわれていた。

①⑥『タイム・アンド・ Tide』 1941年1月11日号<sup>(57)</sup>

『気晴らし2』ハーバート・ファージョンによる再構成 ウィンダム劇場<sup>(58)</sup>

この楽しく息もつかせぬレビューは、人物描写の感覚と時代感覚が<sup>スケッチ</sup>寸劇と扮装——特にピーター・ユスティノフ氏の扮装——を際立たせていることによって、そしてミス・ジョーン・スターンデイル＝ベネットの演技によって、群を抜く舞台となっている。

(56) 『パークリー・スクエア』(*Berkeley Square*, 1927) は米国の劇作家ジョン・L. ボルダーストーン (John L. Balderston, 1889-1954) と英国の作家J. C. スクワイア (J. C. Squire, 1884-1958) の共作による三幕の劇。初演は1926年、ロンドンのセント・マーティン劇場 (St Martin's Theatre) で179回の上演がなされ、1929年にはニューヨークのブロードウェイで229公演を数えた。ヴォードヴィル劇場 (Vaudeville Theatre) はロンドン、ウェストミンスター区ストランド街にある劇場。1870年の開館当初はその名のとおりヴォードヴィルやレビューが主に上演された。その後二度建て直され、現在の建物は1926年建設。収容定員は690人。同劇場での『パークリー・スクエア』の再演は1940年12月24日から1941年2月8日まで、追加で1941年1月16日と、マチネで併せて47回上演された。

(57) *Time and Tide* Vol. 22, No. 2 (11 January 1941), p. 30. *CW*, vol. 12, no. 744, pp. 365-66.

(58) ハーバート・ファージョン (Herbert Farjeon, 1887-1945) は英国の俳優、劇作家、演劇批評家。『気晴らし2』(*Diversion 2*) は1940年10月28日から同年12月28日までおなじくウィンダム劇場 (Wyndham's) で上演されたレビュー『気晴らし』(*Diversion*) の続編。ウィンダム劇場はロンドン、ウェストミンスター区チャリング・クロス通りにある劇場。W. G. R. スプレイグの設計により1899年に竣工。当初三層で759席、後に四層にされ799席に。この劇場での『気晴らし2』の公演は1941年1月1日から4月19日まで、併せて106回上演された。

まだごく若い役者であると思しきユスティノフ氏がハイブラウ向きの劇場にたどり着くの止めるものは何もないと私は予言しておく。道化をいとも軽快に演じているときでさえ氏は知的卓越性の雰囲気を与えることができ、寸劇では常に、ストール席にいる観客でさえ『タトラー』や『バイスタンダー』よりも高級なものを<sup>アシセンム</sup>読んでいるのが当たり前であるかのように演じている。『スウィング・ザ・ゲイト』での教会聖歌のパロディは私がいまでも覚えているほど楽しいものだったし、『気晴らし2』では『リア王』を扱う演劇プロデューサーの3種類のタイプを演じたところはさらに優れている。最初に出てくるドイツ人教授は、コーデリアは実は妊娠していると「直感的に感じている」。次に出てくる「プロレタリアの」プロデューサーは、ウクライナでのトラクター生産をめぐる劇の二番煎じとして『リア王』を不承不承使わざるをえない。そして日曜日の夕べの演劇クラブにいるなよなよしたアマチュア・プロデューサーが演じられる。たとえばこれらの寸劇の2番目に出てくるプロデューサーは、観客がマルクス主義の理論やロシアの5か年計画などについてある程度の知識があるものとみなして演じられている。

この種の寸劇を見るにつけ、レヴューがファッショナブルなエンターテインメントとして発展してきたのは残念なことだと思う。イブニングドレスを着た若い男女が甘ったるいワルツに合わせて踊っているところがレヴューで世界一おもしろいスペクタクルだとみなされてしまったのだ。ユニティ・シアターは、政治風刺の手段としてパントマイムがなしうることを示してきた<sup>(59)</sup>。「真正」の演劇からさらに離れているレヴューにはさらに大きな可能性がある。『気晴らし2』のなかの最良のアイテムはすべて、観客にある程度の知性があることを計算に入れている。たとえば、さまざまな時代物は識別可能な日付に結び付けられており、<sup>おととい</sup>一昨日は馬鹿げて見えるのと同様に魅力的でもあると認める。二人して海水浴を楽しんでいるヴィクトリア朝の若い女性を演じるミス・ヴァイダ・ホープとミス・ジョーン・スターンデイル＝ベネットはたいへん愉快で、1885年ぐらゐのスコットランドである娘が初めて髪をアップにする場面は秀逸である。

ミス・スターンデイル＝ベネットは、ここ数か月のあいだに上演されながら長続きしなかったいくつかのレヴューの欠点を埋め合わせる見物のひとつとなっていた。どんなコーラスのなかでも彼女は際立っており、観客の反応は常に変わらず、「たまに独特な趣きのある顔を見られるのはじつにはっとする！」といったものだった。レヴューや映画やミュージカル・コメディによく出てくる中身のない「美女たち」の代わりに、そこで見る顔は通常の意味ではかわいいというものでさえない、たとえばランカシャーのパン屋で勘定台に立っているようなたぐいの顔だ。しかし彼女の動きはいとも軽快で優美でもあり、役柄を捉える感覚がとても繊細なので、彼女が登場するすべての場面でそれが功を奏している——たとえば、前述のスコットランドの寸劇などがそうだ。

忘れずに言っておかねばならないのは、バーナード・マイルズ氏がハーフォードシャーの農場

(59) ユニティ・シアター (Unity Theatre) は1936年設立の左翼的な演劇クラブ。ロンドン北西部サマーズ・タウン (現カムデン区) を本拠とした。ヴィクター・ゴランツ (Victor Gollancz, 1893-1967) らが1936年に設立したレフト・ブック・クラブ (Left Book Club) および英国共産党と連携して活動した。ここで「政治風刺の手段としてパントマイムがなしうることを示してきた」と述べているのは、1938年から39年にかけて上演された風刺的なパントマイム『森のなかの幼子たち』 (*Babes in the Wood*) を指していると推測される。

労働者を演じて、荷馬車の車輪を家に持ち帰って梯子にしようとする演技である。その訛りがじつに正確だったので——ハーフォードシャー訛りというのは特徴があまりはっきりしないのだが——この州の名前が出てくるずっと前にそれとわかるものだった。サーカスの怪力男の演技のパロディも見事だった。全体として素晴らしいショーであり、爆撃によって中止されないことを祈る。

⑰『タイム・アンド・タイド』1941年2月1日号<sup>(60)</sup>

『ブルー・グース号』ピーター・ブラックモア作 コメディ劇場<sup>(61)</sup>

この劇が熱を帯びずなかなか乗れない印象を受けたのは、コメディ劇場の観客席の凍えるような寒さのせいだけではなかったと思う。中心的なアイデアは優れているにもかかわらず、「<sup>ダンプ・スクイフ</sup>湿った花火」〔期待外れ〕という陳腐な表現がじつにぴったりだと思えるようなところがあった。確かにぱっと輝いて燃える箇所も多少はあったのではあるけれども、シュエと音をたてて立ち消える時間のほうがはるかに長かった。

海辺の行楽地での生活を風刺したこの劇は、戦争が起こっているという事実をまったく無視している。物語を特定の日付に結び付けねばならないとしたら、1930年ということになるだろうか。幕開けの舞台は、気はいいものの無能な町議会議員——ゴルフと庭いじりが趣味で、妻の尻に敷かれている男——の家で、それが間近にせまる〔ギルバートとサリヴァンのコミック・オペラの〕『ミカド』の上演のためにてんやわんやの騒ぎになろうとしている。町議の妻はアマチュア演劇クラブで若い主役を18年間演じてきた。嫌な性格の長女は町長（ビリー・マーソン）と無理矢理結婚しようとしているところだ。その町長は葬儀屋を営んでおり、以前は騎手だった。そこに青年リチャード・ハーディックが海からロマンティックな雰囲気を含めて登場。彼は小さな帆船ブルー・グース号の持ち主で、その船で世界中を航海し、エーゲ海の自分が所有する島に時々立ち寄っている。町議の次女はギルバートとサリヴァンのアマチュア公演を嫌悪していて、冒険の生活に憧れている——この設定だと、結末がどうなるかほとんど疑いようがないのだが、主役のカップルが結ばれ、二人の悪女が目論見がくじかれる前に、お決まりの不運を被らなければならない。

長女は次女の熱愛に反対し不和をもたらそうと企てる。一方、町長はといえば（彼は兄から葬儀屋の事業を受け継いでいた）、現在の自分の尊敬を受ける社会的地位にも、近づいている結婚にもあまり興味がなく、若いカップルの肩を持ち、古い油布製の服を着て釣りに出かけるものだから町民から顰蹙を買う。ヒロインは、母親と口論になるよりは、ブルー・グース号で密かに駆け落ちしようと決意する。実行の日は、みな忙しくしているであろう『ミカド』上演の夜に定

(60) *Time and Tide* Vol. 22, No. 5 (1 February 1941), pp. 91-92. *CW*, vol. 12, no. 754, pp. 382-83.

(61) 喜劇『ブルー・グース号』（*The Blue Goose*）の作者ピーター・ブラックモア（Peter Blackmore, 1909-1984）は英国の劇作家、映画脚本家。コメディ劇場（Comedy Theatre）はロンドン、ウェストミンスター区パントン街に1881年建てられた劇場。当初1186席、その後796席。2011年にハロルド・ピンター劇場（Harold Pinter Theatre）と改称されて現在に至る。『ブルー・グース号』の初演は1940年4月8日、ロンドン西郊のリッチモンドのリッチモンド劇場（Richmond Theatre）にて。コメディ劇場での公演は、1941年1月23日から同年3月15日まで、併せて68回上演された。

める。しかし案の定、いざというときに災難がふりかかる——嵐に見舞われるのだ。リチャード・ハーディックは船から海に落ち、船は岩場に座礁する。救命艇の乗組員たちは、大半がコミック・オペラのコーラス隊で、日本の着物を着たままで救助活動をしなければならない。だが心配はご無用、最後はすべてうまくいき、主役のカップルは元町長を介添え役としてエーゲ海へと脱出する。全体としてかなり楽しませる劇であり、観客をだいぶ笑わせたものの、落ち着かない気分にはさせないようにすることはできなかった。

俳優の演技はこの劇に不相応なほど見事なものであったと言えるのかもしれない。自己中心的な空威張りをする母親を演じたアイリス・ホーイーと、漁船団長の未亡人をバーレスク風に演じたロザリンド・アトキンソンは、ともに素晴らしい演技だった。恐妻家の夫になりそうな男を演じたビリー・マーソンは、昔のミュージック・ホールでの演技とは打って変わって、かなり控えめな演技をしていた<sup>(62)</sup>。5フィート〔約152センチ〕の男が6フィート〔約183センチ〕もある女に命令されると虐げられているように見えるものだが、それよりさらに虐げられた感じに見せていた。

### 『ブルータス殿』 J. M. バリー グローブ劇場<sup>(63)</sup>

甘ったるいファンタジー（ある一群の人びとが再び人生を生きるチャンスを得る話）で、再現にはほとんど値しないが、ジョン・ギールグッド、レオン・クォーターメイン、アーシュラ・ジーンズほか、もっとまじな戯曲に出演したほうがよかったと思われるさまざまな俳優の好演によって舞台は様になっていた。

### ⑮『タイム・アンド・ Tide』 1941年5月3日号<sup>(64)</sup>

#### 『ブラック・ヴァニティーズ』 ヴィクトリア・パレス劇場<sup>(65)</sup>

ヴィクトリア・パレス劇場に爆弾が落ちでもしないかぎりこの活気に満ちたレビューは成功する、と太鼓判を押せる。このレビューは国防市民軍<sup>ホームガード</sup>についての短いスキットを除いて戦争への言及がない。ロンドンがそれまでに長い間見てきたなかで間違いなくもっとも魅力的な女性たちのチームが出演している。

(62) ビリー・マーソン (Billy Merson, 1881-1947) はミュージック・ホールの芸人。第一次世界大戦直前に歌曲「おれの人生を台無しにしたスペイン人」(The Spaniard that Blighted my Life) を作って歌いヒットした。

(63) 「ピーターパンもの」で知られる劇作家バリー (J. M. Barrie, 1860-1937) の戯曲『ブルータス殿』(*Dear Brutus*, 1917) の初演はロンドンのウィングダム劇場にて1917年10月17日から1918年8月24日まで、363回上演。グローブ劇場 (Globe Theatre) での再演は1941年1月20日から同年5月17日まで、併せて124回上演された。なお、「グローブ」という名の劇場は16世紀後半のシェイクスピアの劇場以来複数あるが、これは現在のギールグッド劇場 (Gielgud Theatre) を指す。ロンドン、ウェストミンスター区シャフツベリー・アヴェニューにヒックス劇場 (Hicks Theatre) の名で1906年に開業。1909年にグローブ劇場に改称。1994年に名優ジョン・ギールグッド (John Gielgud, 1904-2000) を称えてギールグッド劇場となった。収容定員は986人。

(64) *Time and Tide* Vol. 22, No. 18 (3 May 1941), p. 364. CW, vol. 12, no. 795, pp. 488-89.

(65) 『ブラック・ヴァニティーズ』(*Black Vanities*) は興行主ジョージ・ブラック (注44参照) によるレビュー。ヴィクトリア・パレス劇場 (Victoria Palace) はロンドン、ヴィクトリア駅近くにある劇場。1911年開業。収容定員1602人。同劇場での『ブラック・ヴァニティーズ』の興行は1941年4月24日から42年1月17日まで、併せて435回なされた。



これは昨年大空襲のせいで切り上げられてしまったヴァラエティ・ショーに何がしかを負っていることは確かであるが、そこから引継いで翻案したいくつかの出し物は多くの人が見たわけではなく、忘却から救い出す価値のあるものだった。出演者全員が才気あふれていたが、そのなかでもずば抜けた出演者がバッド・フラナガン氏である。彼とチェズニー・アレン氏が共演した寸劇「パナマ・タティ」は見事な出来で、これはお馴染みの『白い船荷』の主題に基づく<sup>(66)</sup>。当然ながら、出立して熱帯の雨のなかで英国人的な死を遂げるのがチェズニー・アレン氏で、フラナガン氏はといえば、「南海でもっとも悪名高い女性」（ミス・フランシス・デイ）といっしょに取り残される。この女は別の島から追い出されてきたばかりなのだが、それは「あたしが見習将校に司令官の制服を着せて家に帰したから」なのだという。その他の秀逸な出し物として、「1912年8月のバンク・ホリデーのブライトン」——これの衣装デザインはセシル・ビートン氏が手がけており、ぞっとするようなものではあったが、あの時代についての私の記憶からすれば、大袈裟とはいえない衣装であると思う——そして「青い服を着た二人の娘」では、ミス・ジャクリーン・エルモアとミス・ルシール・ゲイが、鮮やかな宙返りを見事に決めた。しかも、人間の体でそこまでやれるのかと驚くほど長時間続けたのだった。

これは古いミュージック・ホールの流儀で聴衆を巻き込もうとつとめるたぐいのレビューであり、まずまずの成功を収めている。プログラムのなかでいちばん独創的な出し物は「有名人の初出演」<sup>フェイマス・ファースト</sup>で、どこからか掘り起こした初期サイレント映画の色々な初出演場面をスクリーンに映し続けるものだ。これには往古の時代を忍ばせるものが多々含まれていて興味をそそる。例えば、ウォーレス・ビアリー氏が女役で俳優業を始めたことなど私は知らなかった<sup>(67)</sup>。そしてチャプリンの初期のスラップスティック喜劇がいまも面白く、しかもかなり現代にも通じるものがあることも興味深いためここに記す。かつて文明世界におけるすべての女性のアイドルだったルドルフ・ヴァレンティノが『ブラック・ヴァニティーズ』のなかに「アラブのシーク」として再登場したときには、けたたましい笑い声でもって迎えられた。ヴァレンティノが死んでからまだ10年か15年しかたっていないのにもかかわらずである。

『ブラック・ヴァニティーズ』で使われている音楽は舞台装置や台詞に比べて見劣りがする。それをいっそう際立たせるのが、ひとつの長い曲目が、ラグタイムや黒人歌（「コール・ブラック・マミー」や「みんながそれをしている」など）のリバイバルに向けられているという点である。どれも先の〔第一次世界〕大戦の直前に流行ったものなのだ。それらの歌のほとんどが馬鹿げていて低俗なのだが、最近作られている曲よりずっと人の心を掴み、より永続的な力があるように思われる。『ブラック・ヴァニティーズ』で衣装にかけた費用は莫大な額であるに違いない。しか

(66) 『白い船荷』（*White Cargo*）は英国の劇作家リーオン・ゴードン（Leon Gordon, 1894-1960）の戯曲で、1923年にロンドンのウェストエンドとニューヨークのブロードウェイで上演されヒットした。1942年には米国でリチャード・ソーブ（Richard Thorpe, 1896-1991）監督によって映画化もされている。

(67) 「上映された映画は、エッサネイ・カンパニーの「スウィーディ」コメディ映画のひとつで、ウォーレス・ビアリー（Wallace Beery, 1885-1949）が1914年にこれで映画デビューした。ビアリーは映画に出る前は舞台俳優で、サーカスの象の調教師をしていた。ビアリーは身長が6フィート〔約183センチ〕以上あり、後に出た映画の役割で悪役を頻繁に演じたため、女装による演技によって生じた違和感は聴衆にはかなり印象的だったと思われる」（オーウェル全集の編者 Davison の注より。CW, vol. 12, p. 489）。

し軍隊は気晴らしを必要としており、私が訪れた劇場は確かに制服を着た人たちで一杯だった。それゆえ、十数人のすばらしい美女たちにスパンコールのついた衣装を着せるのにかかる労力と材料は、悪い使われかたではないと言えるのかもしれない。

### 『ひとつ屋根の下』 キム・ピーコック作 セント・マーティン劇場<sup>(68)</sup>

この野心的で所々機知に富んだ喜劇には、明確に何か「について」の劇ではないという、よく見られる欠点がある。演劇は小説より書くのが難しいとはいえ、舞台の観客の知的水準が小説の読者より低いことはほとんど疑いの余地がない。最近の劇で『ひとつ屋根の下』と同列に入れられるのは、『ブルー・ゲース号』と『静かな宿』くらいである。これらの劇はみな、多少なりとも真面目さを装った喜劇である。現代生活の「諸問題」を忠実に扱おうと着手しながらも、いずれも1941年に多くの人びとが実際に取り組んでいる何らかの問題に言及するのを頑なに避けているのだ。

『ひとつ屋根の下』では親の横暴という、1920年ぐらいから実生活では消滅した「問題」と、親子間の誤解が提示される。ビル・ハワード氏（デイヴィッド・ホーン）はいかにもヴィクトリア時代的な父親である。酒が過ぎ、子どもに過度に干渉し、また腹立たしい流儀を押しつけるため、家族は気が変になりそうだ。歌の才能があって舞台に出たいと願っていたロニーは、オクスフォードでトラブルに巻き込まれ、労働者の賃金で「仕事に就く」ことを父親に強いられる。後にロニーは劇場と契約することになる。これは驚くほど簡単に契約できたようだが、その際、ロニーが家を去る時にはわずか1シリングも与えられない。娘たちはみな家から逃げることを切望していて、その一人（ミス・ドロシー・ハイソン）は牧師に捨てられた後、孤独に耐えきれず私生児を産む。もちろん、最後にはだれもがみな和解する。

しかしながら、会話は気が利いていて、脇役の描き方もかなりよい。とりわけ父ビル・ハワードの性格付け、それに一家に寄生している叔母（ミス・モリー・ハムリー＝クリフォード）の会話がよい。演技は全篇を通して良く、扱っている内容よりずっと上等である。

### ⑨『タイム・アンド・タイド』 1941年5月17日号<sup>(69)</sup>

#### 『貸家』 ジェフリー・カー作 ウィンダム劇場<sup>(70)</sup>

この活気に満ちたスパイ・スリラーは、よほどひどい演技をしないかぎりはどんな上演にも耐えられることだろうが、レズリー・バンクス、ジョージ・コール、アラステア・シムら主役陣の巧みで機知に富む演技のおかげで、メロドラマであるのとほとんどおなじくらい良質の軽喜劇

(68) 英国の作家・俳優であるキム・ピーコック（Kim Peacock, 1901-66）の喜劇『ひとつ屋根の下』（*Under One Roof*）はリッチモンド劇場で1940年3月11日に初演。セント・マーティン劇場（St Martin's Theatre）での上演は1941年4月24日から同年5月13日まで、24回上演された。同劇場はロンドン、レスター・スクエア近く、ウェスト街にある1916年開業の劇場。収容定員550人。

(69) *Time and Tide* Vol. 22, No. 20 (17 May 1941), p. 402. *CW*, vol. 12, no. 801, p. 499.

(70) 『貸間』（*Cottage to Let*）の作者ジェフリー・カー（Geoffrey Kerr, 1895-1971）は英国の作家・俳優。ウィンダム劇場（注58）でのこの劇の公演は1941年5月3日から同年7月19日まで、併せて90回上演された。同年9月にはアントニー・アスキス（Anthony Asquith 1902-68）監督によって映画化された。

にもなっている。一番の欠点と言え、いささか正しすぎる終わり方をするところだ。

この劇の中心人物は、ドイツの秘密諜報部に狙われるジョン・バリントンで、変わり者の天才の一人である。いろいろと発明をするのだが、それがあとで百万長者たちによって盗まれてしまう。ここでは彼は快適なカントリー・ハウスと執事その他の使用人たちを持ち、自分の力でかなりうまくやってきたように見えるが、小説に描かれる発明家たちと同様に、世間知らずで、身ぐるみをはがされる定めであるのが明らかだ。このとき彼が発明したのは、意識や触覚をそのまま保ったままで、すべての痛みの感覚を消してしまう麻酔薬である。ドイツ軍はそれを入手している。その薬が突撃専用隊にとって格好の強壮剤となることがわかっているからだ。これ以上書くことはサプライズを台無しにしてしまうので控えるが、筋の運びが一貫して生気にあふれ、巧みで、十分に説得力があること、また結末は美德が勝利を収めること、しかも通常よりもさらに徹底してそうなるということを言っておきたい。

上記の俳優とは別に、フレッド・グローヴスとリチャード・ウィリアムズの好演も見られる。

②『タイム・アンド・タイド』1941年6月14日号<sup>(71)</sup>

『心のともしび』エムリン・ウィリアムズ グローブ劇場<sup>(72)</sup>

役者が役者たちについて書いたこの劇は、話が込み入りすぎていて要約しがたいのだが、感傷的なメロドラマと形容することができるだろう。そのなかでは技巧と台詞がストーリーよりもずっと優れている。

中心人物のマドック・トマス（作者のエムリン・ウィリアムズ氏自身が演じる）は、酒で身を持ち崩した役者であり、体の不自由な妹のカトリン（ミス・アンジェラ・バドリー）は仕事に就く機会を犠牲にし、兄の世話をしている。マドックが「リア王」の役を演じるチャンスを得ると同時に、カトリンも幼い頃の事故によって生じた小さな奇形を気にしない青年に出会ったことで、避けることのできない葛藤が生じる。マドックはずっと禁酒を貫いてきたのに、「リア王」を初めて演じる直前になって、また酒に手を出してすべてを台無しにする。カトリンは、婚約を解消して振盪譫妄<sup>しんせんせんもう</sup>の兄を救うことに再び身を捧げようと決意しかかるが、ありえないような感傷的な自殺によって問題が一挙に解決される。

いま述べた以外にサブプロットがかなり多くある。全体として演技はかなりの高水準で、戯曲はよくまとまっており、脇役たちも注意深くしっかりと描かれている。実際、エムリン・ウィリアムズ氏は持ち前の力をかなり発揮している。氏の才能をなぜもっと価値のある素材に使わないのだろうか、不思議に思わせるほどである。

(71) *Time and Tide* Vol. 22, No. 24 (14 June 1941), p. 503. CW, vol. 12, no. 812, p. 511.

(72) エムリン・ウィリアムズ (Emlyn Williams, 1905-1987) はウェールズの作家・俳優。『心のともしび』(*The Light of Heart*) の初演はロンドン、アポロ劇場 (注35) で1940年2月21日から6月8日まで127回上演。グローブ劇場 (注63) での公演は1941年6月4日から11月1日まで併せて180回上演された。

②『タイム・アンド・ Tide』1941年6月28日号<sup>(73)</sup>『同盟国への讃歌』アンステイチュ・フランセ<sup>(74)</sup>

ドイツと戦うすべての国の芸術的成果に敬意を表するこの試みは、殊勝な身ぶりだった。フランスとイギリスの作品に関してはすぐれたエンターテインメントにもなっていた。だがオランダやチェコスロバキアのように、自国の文学作品から抜粋した翻訳文でその国を表わそうとする試みは、それほどうまくいかなかった。例外はイブセンの劇『野鴨』の一場で、これがフランス語にされてパミラ・スターリング、ジョルジュ・デュモンソー、P. ボニファによって繊細に演じられた。だが哀愁に満ちていながら面白くもあるこの劇がめったに上演されないことを考えるなら、グレーゲルス・ヴェルレが妻と「永久に」別れると宣言する魅力的なまでに馬鹿げた場面を使わずに、娘が自殺を考えはじめる場面を選んだのは、かなり残念に思われた。

エドワード・スターリングとアーサー・バーンは『ジュリアス・シーザー』の作中のブルータスの天幕の場面を格調高く演じ、ジョルジュ・デュモンソーはモリエールの『守銭奴』の一場面を絶妙に演じた。プログラムの残りの部分は、芸術的というより、むしろ政治的に満足のものだった。だがアンステイチュ・フランセでの定期的な公演は称賛に値する。というのも、どの観点から見ても文化的連帯は望ましく、クイーンズベリー・プレイスのしっかりした造りの大型劇場は、商業演劇の舞台ではなしえないような、演劇の実験の場となりうるからだ。

②『タイム・アンド・ Tide』1941年7月12日号<sup>(75)</sup>『陽気な幽霊』ピカディリー劇場<sup>(76)</sup>

この戯曲をカワード氏がいつ書いたのかは知らないが、これはカワード氏がこれまで長きにわたって書いてきたもののなかで最高作である。これが何に「ついて」書かれているか述べなければいけないとしたら、スピリチュアリズムをめぐる<sup>スケッチ</sup>スクリューと形容してよいのかもしれない。これはスピリチュアリストたちの言い分を拒むのではなく、それを受け入れることで成功している。だがプログラムに記されている「3幕のありそうもない<sup>ファルス</sup>笑劇」という但し書きがぴったりである。この劇は最初から最後までありえない。しかし本当に軽いタッチで書かれているため、真実味を帯びるようにきっちりと描こうとする多くの劇とちがって、無理やり信じさせようと気張るような

(73) *Time and Tide* Vol. 22, No. 26 (28 June 1941), p. 543. CW, vol. 12, no. 822, pp. 519-20.

(74) アンステイチュ・フランセ (Institut Français) はフランス語・フランス文化の海外での振興のための1910年にフランス政府が設けた組織 (日仏学院は日本での支部にあたる)。イギリス支部にあたる「英仏学院」(Institut Français du Royaume-Uni) はサウス・ケンジントンのクイーンズベリー・プレイスに置かれている。その施設内の劇場で開催された『同盟国への讃歌』(*Hommage aux Allies*) のレビューがこの記事ということになる。

(75) *Time and Tide* Vol. 22, No. 28 (12 July 1941), p. 543. CW, vol. 12, no. 830, p. 525-27.

(76) ノエル・カワードの戯曲『陽気な幽霊』(*Blithe Spirit*, 1941) は1941年の春に短期間で執筆され、1941年6月16日にマンチェスターで初演。1941年7月2日から1942年6月27日までピカディリー劇場 (注32) で上演されたあと、セント・ジェイムズ劇場で1942年6月29日から10月3日まで、侯爵夫人劇場で1942年10月6日から戦後の46年3月9日まで、併せて1997回のロングランとなった (cf. Morley 266-66)。1945年にはデイヴィッド・リーン (David Lean, 1908-91) 監督によって映画化されている。



ところが見られない。

チャールズ・コンドメイン<sup>(77)</sup>（セシル・パーカー）は売れっ子の作家で、「奇抜な」警句を口にして、それを複数回使ってしまうようなタイプである。第一幕で彼は、幾分かジョークのつもりで、交霊会を開く準備をしている。準備の合間に彼は後妻のルース（ミス・フェイ・コンプトン）と口論をしている。主な理由は7年前に先立たれた前妻のエルヴィラのことである。降霊術をしてみるとエルヴィラが「肉体を備え」て出現するが、彼女の姿が見えて声が聞こえるのはチャールズだけである。さらに悪いことに、ひとたび「肉体を備え」て出てきてしまったら厄介払いすることができず、家のなかの幽霊としての彼女の存在が次第にみんなに受け入れられていく。二人の女性が口論するのだが、その一方は他方を見ることも聞くこともできず、相手がいない室内の見当違いの方向に向かって言い返したりする。この二人の口喧嘩がこの劇のいちばんの見どころかもしれない。単純ではあるが巧みな結末がどうなるか、それは明かしたくない。

この劇は楽しませること以外にはいかなる目的も持っていないのではあるが、スピリチュアリズムの風刺としてこれほど痛烈なものはほかにないように思う。どの霊媒も早晩いかさまの現場を取り押さえられるものだと、証拠をたっぷりあげて証明することが結局何の役に立つというのだろう。そうした現象のなかには依然として真正のものがあるかもしれないではないか。だがこうしたことがすべて本当だと仮定してみたらどうだろうか。まさにそのとき、スピリチュアリストの言い分は根本的にどうでもいいということ、あの世に繋がろうと努めながら現世で自分の人生を費やし、それから現世と繋がろうと努めながらあの世で永遠に過ごすことがいかに不毛かという事実が浮かび上がる。カワード氏は、『サイキック・ニュース』<sup>(78)</sup>などで見受けられるような、ベールの彼方の生<sup>(79)</sup>の俗悪さ、陳腐さを十分に活用する。エルヴィラは、蓄音機が鳴りカクテルが手元にないと幸福を感じられないタイプの若い女性なのだが、霊界にすっかりなじんでいて、ジャンヌ・ダルクを「かなり面白い人だわ」と言ったり、チングス・ハーンを「とても素敵なおじさま」と評したり、マーリンやカリオストロやその他が演じた居間での手品を「ひどく退屈」と述べたりする。だがこの劇でもっともよく練られた人物は霊媒師のマダム・アーカティ（ミス・マーガレット・ラザフォード）である。謎めいて東洋的といった風ではなく、ぶっきらぼうで心が温かく、アウトドア好きな女性だ。自転車に乗るのが大好きで、交霊術を囲む人たちが疲れてぐったりしてくるとホッケー場で使う言い回しで鼓舞する。トランス状態に入ったかと思うと正気に返る、その弾むような動きはびっくり箱さながらである。

全体を通して端役の演技に至るまですばらしい——やりがいのある役とそうでもないのと、かなり程度の差があるということは認めなければならないが。幽霊となった前妻を演じたミス・ケ

(77) 役名の「チャールズ・コンドメイン」(Charles Condomine) は、劇評の原文では「チャールズ・コンドマン」(Charles Condoman) と記されており、全集版でとくに注記はなされていないが、これはオーウェルの誤記もしくは誤植と思われるので「コンドメイン」と訂正して訳出した。

(78) 『サイキック・ニュース』(Psychic News) は1932年創刊のイギリスのスピリチュアリズムの週刊新聞。2010年まで刊行され、その後所有者が変わり、いまは月刊誌として出ている。

(79) 「ベールの彼方の生」(life beyond the veil) というフレーズは、20世紀初頭のイギリスの代表的なスピリチュアリストである G. ヴェイル・オーウェン師 (Rev. G. Vale Owen, 1869-1931) の同名の著作 (*The Life Beyond the Veil*, 1920) を暗示している。

イ・ハモンドが最高の演技を見せた。ミス・フェイ・コンプトンの役はあまり魅力的ではなくて、難しい役柄に思えるが、巧みに演技切った。セシル・パーカー氏は、赤いベルベットのディナージャケットをまとい、あのような功成り遂げた作家であればさもありなんとと思わせるような、無神経な俗人と横柄な阿呆を程よく混ぜ合わせたような人物を表現していた。

『じゃじゃ馬ならし』製作ロバート・アトキンズ氏 サザーク・パーク<sup>(80)</sup>

この最初の野外公演が成功を収めたことは疑いない。その成功が好天によるのか、あるいはエリザベス朝の舞台を用いたことによるのか、戯曲自体がすぐれているためか、はたまたウィンストン・チャーチル夫人が観劇したおかげなのか、いずれであるのかは何とも言えない。クリストファー・スライの挿話は、アイデアは盗まれたものかもしれないが、シェイクスピア一流の雰囲気醸し出している。その挿話のあとは『じゃじゃ馬ならし』はシェイクスピアの最高の成果に数えられるものではなく、観客に最後まで座って見てもらうためにギャグと悪ふざけが必要になる。キャタリーナに扮したミス・クレア・ルースの演技は確かに活気にあふれていて、ペトルーチオ役のパトリック・キンセラ氏が彼女を飼いならすのは難しいと思われる 때가ちょくちょくあった。レイモンド・ロレット氏がビールに酔った愉快なクリストファー・スライを演じ、アトキンズ氏本人がグレミオを好演した。好天が続けばこうした野外公演がもっと見られることが望める。

②『タイム・アンド・タイド』1941年7月19日号<sup>(81)</sup>

『ジョン王』ニュー・シアター<sup>(82)</sup>

『ジョン王』が常に与える印象は、年代記からそのまま切り取られ、急いで韻文にされて、章の途中で終わるといったものだ。これは簡単に上演できる劇ではないのだが、これをニュー・シアターに掛けたオールド・ヴィック座は最上のものを作り出している。ひとつには韻文を韻文として語ることによって、もうひとつには見事な舞台装置によってそれをなしえている。全編を通して、パジェントの効果が強調されており、イングランドは赤、フランスは青で示され、身ぶりがかなり精密に様式化されている。とりわけ初めのほうのいくつかの場面がそうだったのだが、ほとんどバイユーのタペストリーのなかに足を踏み入れたような気分になったときがたびたびあった。そのため、劇の中盤の通り一遍の組み入った陰謀が退屈には思えなかったし、幕切れで湧き上がる愛国主義<sup>ジンゴイズム</sup>の見事な発露に至っては本当に感動的だった。

だが、奇妙な事実だが、『ジョン王』の主題の多くは、数年前よりもはるかに現代的でわかりやすいものになっているように見える。往古の文学の多くについてもそれが当てはまる。たとえ

(80) ロバート・アトキンズ (Robert Atkins, 1886-1972) は英国の俳優、舞台監督、製作者。シェイクスピア作『じゃじゃ馬ならし』(*The Taming of the Shrew*, 1593-94) のこの野外公演はロンドン南部サザーク・パーク (Southwark Park) にて1941年8月4日から8月16日まで併せて21回上演された。

(81) *Time and Tide* Vol. 22, No. 29 (19 July 1941), p. 602. CW, vol. 12, no. 832, pp. 531-32.

(82) ニュー・シアターについては注3を参照。シェイクスピアの『ジョン王』(*King John*, 1596-97) のニュー・シアターでの公演は1941年7月7日から7月19日まで、併せて16回上演された。

ば『ローマ帝国の興亡』を考えてみればよい。際限のない陰謀、暗殺、裏切り、虐殺、内戦がある。少し前にはそれは何と遠く、信じがたいことに見えたことか。そしていまでは何とすべてがなじみ深いものに思えることか！ 玉座に就いた日に兄弟を絞殺するオリエントの慣習はエリザベス朝の人びとにさえ衝撃を与えたものだが、現代の独裁者たちはそれを少しだけ変形させて復活させてみせたのだった。『ジョン王』を見てみると、「これを私は前にどこかで見なかっただろうか」という思いに終始とらわれるのである。たとえば、アンジェの城壁の前で戦っていたフランス軍とイングランド軍が突然合意に達し、ともにアンジェを攻めることに決めるくだりなど、少しも驚くべきことに見えない。イングランドを攻撃するようにフランスをけしかける教皇特使は、不思議なほど国際連盟を想起させるし、彼の主張がもたらした帰結も同様である。だれもが自分の経済的な損得勘定で教皇に従ったり逆らったりする場面などは、マルクスが喜びそうなものである。クヴィスリングのモチーフさえ表現されている<sup>(83)</sup>。フランスがイングランドに侵攻したときに3人のイングランドの貴族が裏切っておきながら、最後の瞬間に急にまた逆側につくくだりがそうだ。

この戯曲のなかで真正の人物といえるのは、〔フィリップ・〕ザ・バスタードとヒューバート・ド・バラの二人しかいない。しかし巧みな演技によってジョン王と王妃エリナーという二人も真実味を帯びていた。エズミ・チャーチは王妃エリナーをパストン家書簡<sup>(84)</sup>から直接抜け出したような邪悪なやり手の老婆にしていた。ジョン王は戯曲のなかではじつは一貫性のある人物ではないのだが、それをアーネスト・ミルトン氏は一貫性があるように見せていた。これは繊細な演技の賜物だ——赤毛の、吐き気を催させるような偽善者で、大いに魅力を振りまき、感情的でほとんど忌まわしい仕方の下位の者たちの支持を取り付けることができるものの、一瞬たりとも正直者であるようには見せないのだ。アーサー王子とヘンリー王子を女優が演じなければならなかったのは遺憾なことであつたのかもしれない。アーネスト・ヘア氏は、常にひげを二日間剃らずにいるように心がけているといった顔で、おどおどしたヒューバートを見事に演じた。シビル・ソー نداイクはコンスタンスという報われない難役をうまくこなしていた。

(83) 「クヴィスリングのモチーフ (the Quisling motif)」ノルウェイの政治家でヴィドクン・クヴィスリング (Vidkun Quisling, 1887-1945) が1940年にドイツ軍によるノルウェイ侵略に協力したことから悪名を馳せ、quislingは「売国奴」「裏切者」を意味する英語普通名詞となった。

(84) 「パストン家書簡」(Paston Letters) は15世紀に英国東部の名家パストン家の家族間で交わされた手紙。

②『タイム・アンド・ Tide』1941年8月2日号<sup>(85)</sup>『レイディは行儀よく』国王陛下劇場<sup>(86)</sup>

この劇は戦争勃発後最初に製作されたミュージカル・コメディという触れ込みである。確かに今次の戦争はそれとわかる程度ではこの劇にまったく入り込んでいない。ハリウッドの撮影所で展開される劇であり、時事的な話題は巻き煙草の不足についての冗談がときおり挟み込まれるぐらいしかないからだ。とはいえ、ミュージカル・コメディの筋書きにはリアリズムが顕著に見られるものではないということはあるにしても、この劇はとくに愚かしいというものではない。また、この種のエンターテインメントにはスノップさが染みわたっているものだが、そうした特徴は本作にはまったく見られない。生足のモチーフでさえ通常ほど目立ってはいない。

ハリウッドは、少なくとも人が想像するものとしては、風刺の機会をたっぷり提供するところであり、映画の裏にあるばかげた虚栄心や悪だくみ、有力者の横暴、スター志望の切望がうまく利用されている。ほぼ全体をとおして配役がすばらしいが、この劇はスタンリー・ルピノなくして成り立たないだろう。いつでもクビにされそうな、虐げられた「スタントマン」役で、まさしくどの喜劇的エンターテインメントにも必要な現世的な俗悪さを本作にもたらしめている。彼はサンチョ・パンサ的な人物、小太りの男で、その低俗な知恵でもってあらゆる英雄的態度に茶々を入れるのだが、何かというと不当な災難に見舞われてしまう。しょっちゅうバナナの皮を踏んだり、何かの手違いで女性の寝室に半裸でいるのを見つかってしまったり、といったたぐいの災難である。『レイディは行儀よく』のとびきりの名場面は、スタンリー・ルピノが演技への意欲に突如目覚め、『ヴェニスの商人』のポーシャの台詞を映画監督にむけて朗読するのだが、その監督は彼がいるのを忘れてほかの人物に演技を付けているという場面かもしれない。もうひとつの名場面は、スタンリー・ルピノとハートリー・パワーが不都合な結婚許可証を廃棄するために登記所に忍び込んだところ、そこで警察に捕まり、慌てて結婚式を挙げることで難局を切り抜けるところだ。その場面でハートリー・パワーはほんの3分ほどで女性になり替わってしまう。

明確な「主演女優」がいないことがこの劇の特徴のひとつである。スタンリー・ルピノと結婚し、その翌日にあいにく重婚せざるをえなくなる映画女優のボニー・ドリュエを演じるミス・パット・カークウッドが主要な女性役といえるのかもしれないが、ミス・ジュディ・キャンベルとミス・サリー・グレイもそれに劣らず重要な役をこなしている。楽曲は特に耳に残るものはないが十分楽しませるものであり、コーラス隊は、配給券の有無にかかわらず、いまだに頻繁に衣装替

(85) *Time and Tide* Vol. 22, No. 31 (2 August 1941), p. 645. *CW*, vol. 12, no. 838, pp. 541-42.

(86) ミュージカル・コメディ『レイディは行儀よく』(*Lady Behave*) は英国の俳優・歌手・作家のスタンリー・ルピノ (Stanley Lupino, 1893-1942) 作、音楽エドワード・ホーラン (Edward Horan, 1898-?)。初演は1948年7月1日、マンチェスターのパレス劇場にて。国王陛下劇場 (His Majesty's Theatre) はロンドン、ウェストミンスター区ヘイマーケットにある劇場。1705年に女王劇場 (Queen's Theatre) として開業。王位継承の際に英国王の性別によって名称変更がなされ、1952年のエリザベス二世の即位後は女王陛下劇場 (Her Majesty's Theatre) とされたが、2022年のエリザベス二世の死去とチャールズ三世即位にともない、2023年のチャールズの戴冠式後に再度国王陛下劇場と変えられることが伝えられている。収容定員は1216人。このミュージカル・コメディの同劇場での公演は1941年7月24日から1942年4月25日まで、併せて402回上演された。



えをするように思われ、だれもがうらやむほどである。

『ニュー・アンバサダーズ・レビュー』アンバサダーズ劇場<sup>(87)</sup>

にぎやかで楽しいがいささかムラがある。一番の見どころはレジナルド・ベックウィズ氏が食料品店でシリアルを買う女性を演じる寸劇であろうか。ミス・ベティ・アン・デイヴィスも面白い一人芝居をしている。ミス・マッジ・エリオットが高級娼婦に扮する演目はそう上出来とは言えないのかもしれない。アーネスト・セシジャーは国防市民軍をサブモチーフにした女性の役を見事に演じ、私は大いに笑わされたが、あいにく、何年か前にセシジャーが似たような寸劇を演じてそちらのほうがおかしかったことを思い出してしまったのだった。

『王に統べられしこの島』ウェストミンスター劇場<sup>(88)</sup>

シェイクスピアからの抜粋からなるこのシリーズは、意図としては立派なのだが、完全にうまくいっているとは言えない。ヘンリー・エインリー氏が「舞台裏」で一度朗読を挟み込んではいれるものの、ウィルソン・ナイト教授以外は舞台に登場しない。『リチャード三世』や『ヘンリー五世』などから台詞が採られ、そこにシェイクスピアの政治的な意図についての講話が附される。舞台衣装はなく、ドラムひとつを除けば音楽もない。

②⑤『タイム・アンド・ Tide』1941年8月9日号<sup>(89)</sup>

『接近戦』W. O. ゴーミン作 アポロ劇場<sup>(90)</sup>

知的な点で平均を上回っているこの劇は、出演者が二人だけというところが変わっている。演者の二人のいずれも、舞台から引っ込んでいられる時間がおよそ一分を超えることはないので、双方にかかる負担は非常に大きいものであるに違いない。そしてしまいには観客のなかにも一種のいら立ちが生じる。というのも、すべての重要な出来事が「ステージ外」で生じるはずだという予想が観客に当然ついているためである。舞台上の破滅の定め二人は常に、だれそれが来た

(87) アンバサダーズ劇場については注9を参照。『ニュー・アンバサダーズ・レビュー』(*New Ambassadors Revue*)はウェールズ出身の劇作家ダイアナ・モーガン(Diana Morgan, 1908-1996)ほかの作になるレビュー。同劇場にて1941年7月18日から9月13日まで併せて76回の上演がなされた。

(88) ウェストミンスター劇場については注43を参照。『王に統べられしこの島』(*This Sceptred Isle*)は「三部からなる戦時におけるシェイクスピアのイギリスへの呼びかけの演劇化」(Dramatization of Shakespeare's Call to Great Britain in Time of War, 3 Parts)と銘打たれ、シェイクスピアのさまざまな戯曲からの抜粋を朗読し、合間にシェイクスピア学者のウィルソン・ナイト(Wilson Knight, 1897-1985)が解説を加えるという趣向だった。初演は1940年。アンバサダーズ劇場にて1941年7月21日から26日まで、併せて8回の公演がなされた。なお、タイトルの“This Sceptred Isle”はシェイクスピアの『リチャード二世』(*Richard II*, c. 1595)のなかの台詞に由来する。

(89) *Time and Tide* Vol. 22, No. 32 (9 August 1941), p. 666. CW, vol. 12, no. 839, pp. 542-43.

(90) アポロ劇場については注35を参照。『接近戦』(*Close Quarters*)はドイツの劇作家W. O. ゴーミン(Willy Oscar Somin, 1898-1961)の3幕の戯曲『攻撃』(*Attentat*, 1935)の英語版。ギルバート・レノックス(Gilbert Lennox) 翻案。英国での初演は1935年6月25日、ロンドン、エンバッシー劇場にて上演。アポロ劇場での公演は1941年7月31日から8月23日まで、併せて28回上演された。

とき何が起こるか、あるいは警察がドアをたたいたとき何を言えば最善かについて思案する。しかし観客はこの劇のパンフレットを見ていて、二人の名前しか書かれていないとわかっているため、だれそれは訪れず、警察がドアをたたくこともないと知っており、驚く可能性が極めて小さくなっている。なぜ出演者がこれだけ削られてしまったのかは測りがたい。劇の物語では舞台上の二人に他の人びとを関わらせており、さらにある程度の外部の介入でさえも、電話での会話、ラジオのアナウンス、隣人たちからときおり発せられる叫びというかたちで必要とされているからである。

本質的にこの劇は高級なメロドラマである。カレル・ステパネク氏演じる夫のグスタフ・ベルクマンは小さな政党の世界でかなり重要な人物である。ベルクマンの妻リーザ（ミス・ベアトリクス・レーマン）は「非政治的」で、夫が考えていることだから夫の意見を受け入れるといったタイプの女性だが、心の底では、夫が政治から足を洗い、もっと稼げる仕事に就いてほしいと思っている。幕開けの時点でのこうした状況は、現代の特徴的な状況のひとつであるが、まったく別種の劇の素材があり、いくつかの対話には英国の舞台ではあまり見られない政治的成熟がある。それゆえ残念なのは、この劇がほとんど即座によくある殺人劇に発展してしまい、政治的動機など持ち出さないほうがよかったと思えてしまうことだ。

幕開けの場面でベルクマンは集会から帰ってきたばかりである。その集会で彼は演説を成功させ、その結果党から給料を支払われる仕事を提供されることになった。しかしそのほぼすぐあとに、ベルクマンが嫌っていることが知られている内務大臣が殺害されたニュースがラジオで告げられる。ベルクマンが疑われるのは明白だ。自身の党の役員でさえ彼を疑い、スキャンダルになるのを恐れて彼を追放したいと切望する。劇の終わりは二人の自殺で、そのあとにかなり効果的なちょっとしたサプライズが起きるが、ここでは明らかにしない。

両俳優とも、難しく体力を使う役をうまく演じたが、二人のうちステパネク氏がわずかに良かったように思った。

## 参考文献

- Calder, Angus. *The People's War: Britain 1939–1945*. Pimlico, 1969.
- Coward, Noël. *Collected Plays: Four*. Introduced by Sheridan Morley. Methuen, 1999.
- Davison, Peter, editor. *The Complete Works of George Orwell*. 20 vols. Secker and Warburg, 1986–98. (注では CWと略記する)
- Fenwick, Gillian. *George Orwell: A Bibliography*. Oak Knoll P, 1998.
- Gaye, Freda, editor. *Who's Who in the Theatre*. 14th ed. Originally Compiled by John Parker. Isaac Pitman & Sons, 1967.
- Heinrich, A. "Theatre in Britain during the Second World War." *New Theatre Quarterly*, 26 (1), 2010: pp. 61–70.
- Howard, Diana. *London Theatres and Music Halls 1850–1950*. Library Association, 1970.
- Kershaw, Baz, editor. *The Cambridge History of British Theatre, Vol. 3, Since 1895*. Cambridge UP, 2004.
- Larkin, Colin. *The Encyclopedia of Popular Music*. 4th ed. Oxford UP, 2006.
- Lynn, Vera, with Robin Cross and Jenny de Gex. *We'll Meet Again*. Sidgwick & Jackson, 1989.
- Morley, Sheridan. *A Talent to Amuse: A Life of Noel Coward*. Dean Street P, 2016.
- Shaw, Bernard. *In Good King Charles's Golden Days*. Constable, 1939.
- Sullivan, Alvin, editor. *British Literary Magazines: The Modern Age, 1914–1984*. Greenwood P, 1986.
- Wearing, J. P. *The London Stage 1940–49: A Calendar of Productions, Performers, and Personnel*. 2nd ed. Rowman & Littlefield, 2014.
- Weinreb, Ben, and Christopher Hibbert, editors. *The London Encyclopaedia*. Papermac, 1983.
- White, Jerry. *The Battle of London 1939–45: Endurance, Heroism and Frailty Under Fire*. Bodley Head, 2021.
- 英米文化学会編、藤岡阿由未監修『ロンドンの劇場文化——英国近代演劇史』朝日出版社、2015年。
- カワード、ノエル『ノエル・カワード戯曲集』加藤恭平訳、ジャパン・パブリッシャーズ、1976年。
- 川端康雄『ジョージ・オーウェル——「人間らしさ」への讃歌』岩波書店、2020年。
- 川端康雄「<sup>フリックス</sup>「昨夜、映画へ」——映画評論家としてのオーウェル」『増補 オーウェルのマザー・グース——歌の力、語りの力』岩波現代文庫、2021年、309–89頁。
- コクトー、ジャン『ジャン・コクトー全集 7』堀口大学監修、創元社、1983年。
- ショー、バーナード『バーナード・ショー名作集』鳴海四郎ほか訳、白水社、1966年
- デイヴィソン、ピーター編『ジョージ・オーウェル日記』高儀進訳、白水社、2010年。

川端康雄（日本女子大学大学院文学研究科英文学専攻教授）

熊谷由里子（日本女子大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程後期2022年3月単位取得退学。

職業能力開発総合大学校准教授）